ISSN 1882-9775

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 17（2005）年度

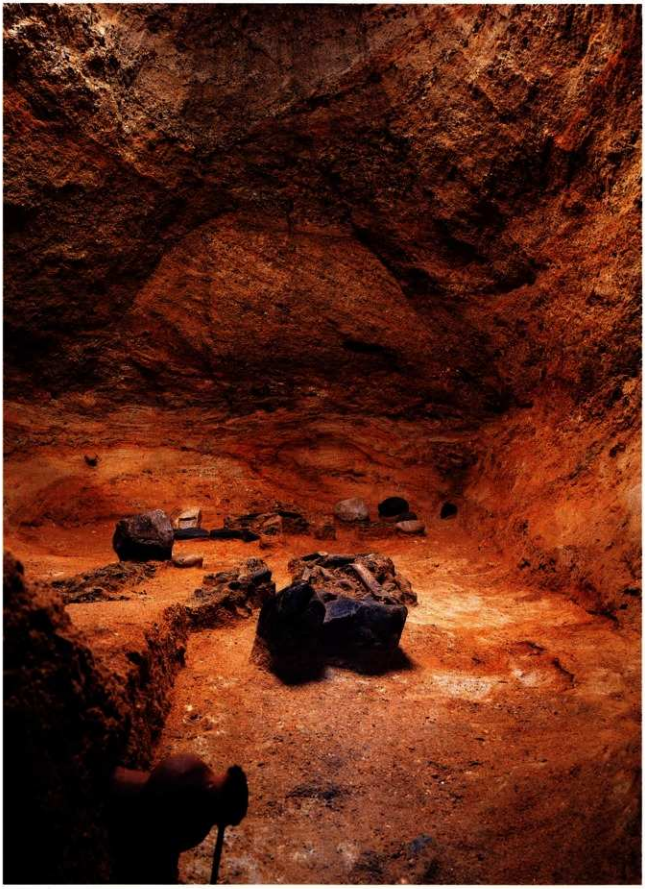
奈良市教育委員会

2008

1：史跡大安寺旧境内　第110次　西塔地区の調査　基壇全景航空写真（南から）【本文71ページ】

2：　史跡大安寺旧境内　第110次　西塔地区の調査　西階段南端地覆石（東から）【本文71ページ】

3：　史跡大安寺旧境内　第110次　西塔地区の調査　基壇北面版築状態（北から）【本文71ページ】



4：　歌姫赤井谷第３号横穴の調査　第３次　横穴玄室（南から・奈良文化財研究所撮影）【本文 79 ページ】

5：平城京跡（右京六条四坊十四坪）の調査 第543次　調査地航空写真（南西から）【本文55ページ】

6：平城京跡（右京六条四坊十四坪）の調査 第543次　木棺墓SX804（南西から）【本文55ページ】

7：平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町の調査 第531次
井戸ＳＥ09出土 六稜鏡 【本文28ページ】

8：　ゼニヤクボ遺跡全景　航空写真　（南から・1992 年撮影）【本文 165 ページ】

9：　ゼニヤクボ遺跡全景　航空写真　（東から・1992 年撮影）【本文 165 ページ】

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成17（2005）年度

奈良市教育委員会

2008

例　言

1．本書は、平成17年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査等の各事業の概要についてまとめた年報であり、昭和60年度分から平成16年度分まで刊行した『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』に代わるものとして、新たに創刊したものである。

2．平成17年度における埋蔵文化財調査および出土遺物整理等の体制は、下記のとおりである。

奈良市教育委員会事務局社会教育部（当時 平成19年度より生涯学習部に名称変更）
文化財課

課　長　　福井　進
主　幹　　谷村　勝
課長補佐　森下　惠介

埋蔵文化財調査センター

所　長　　川本　恭久

調査第一係　係長　立石堅志　技術吏員　鐘方正樹　秋山成人　安井宣也
松浦五輪美　宮崎正裕　久保清子
山前智敬　大窪淳司

調査第二係　係長　三好美穂　技術吏員　森下浩行　武田和哉　中島和彦
久保邦江　池田裕英　原田香織
再任用職員　森川倫秀

庶　務　係　係長　北尾秀一　事務吏員　山形和宏

3．発掘調査、出土遺物整理等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、ならびに、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4．各章の冒頭には、さらに個別の例言を示しているので、併せて参照されたい。

5．本書の編集は平成19年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下惠介、同 調査第一係長 森下浩行、同 調査第二係長 鐘方正樹の指導のもと、武田和哉が担当した。

目　次

巻首カラー図版……Ⅰ～Ⅵ
目次・例言……ⅰ・ⅱ

第１章　平成17年度埋蔵文化財調査概要報告……1
１．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査……6
平城京跡（左京五条四坊九・十六坪、東四坊坊間東小路）の調査　第541次
２．近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査……17
(1) 西大寺旧境内の調査　第20次……18
(2) 西大寺旧境内・平城京跡（一条南大路）の調査　第21次……21
３．平城京跡（東四坊大路）・油坂遺跡の調査　第529次……23
４．平城京跡（左京四条三坊六坪）の調査　第530次……27
５．平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡の調査　第531次……28
６．平城京跡（右京北辺四坊三坪）の調査　第532次……37
７．平城京跡（右京四条四坊・西三坊大路）の調査　第533次……39
８．平城京跡（右京二条二坊九坪）の調査　第534次……40
９．平城京跡（左京三条二坊三坪）の調査　第535次……41
10．平城京跡（左京五条二坊二坪・五条条間路）の調査　第536次……42
11．平城京跡（左京五条六坊二坪）の調査　第537次……44
12．平城京跡（左京九条三坊十一・十二坪）の調査　第538次……45
13．平城京跡（右京六条四坊十三・十四坪）の調査　第539次……48
14．平城京跡（右京二条四坊十二坪）の調査　第540次……49
15．平城京跡（左京三条四坊四坪）の調査　第542次……53
16．平城京跡（右京六条四坊十四坪）の調査　第543次……55
17．平城京跡（左京三条四坊十三坪）・油坂遺跡の調査　第544次……65
18．平城京跡（左京五条二坊七坪）の調査　第545次……67
19．平城京跡（左京八条四坊十四坪）の調査　第546次……68
20．平城京跡（朱雀大路）の調査　第547次……69
21．史跡大安寺旧境内の調査……70
(1) 西塔地区の調査　第110次……71
(2) 西面築地地区の調査　第111次……74
(3) 西面中房地区の調査　第112次……76
(4) 苑院推定地の調査　第113次……77
22．成務陵古墳陪塚3号隣接地の調査　第２次調査……78
23．歌姫赤井谷第３号横穴の調査　第１～３次……79
24．古市桜谷遺跡・古市城跡の調査　第４・５次調査……87
25．平成14～17年度実施試掘調査一覧……104
26．平成14～17年度実施工事立会一覧……107

第２章　自然科学分析報告……135
１．平城京跡（右京三条四坊九坪・二条大路）の調査 第517次 採取資料の放射性炭素年代測定……137
２．平城京跡（右京二条四坊十二坪）の調査 第540次 採取資料の放射性炭素年代測定……138
３．平城京跡（左京五条六坊二坪）の調査 第537次 における花粉分析……139
４．史跡大安寺旧境内・西塔地区の調査 第110次 における西塔跡関連資料のTL年代測定……142
５．史跡大安寺旧境内・西塔地区の調査 第100・102・105次 出土金属製品の鉛同位対比分析……146
６．史跡大安寺旧境内・西塔地区の調査 第105次 出土木材の樹種同定……160

第３章　平成17年度保存活用事業報告……161

附　章　ゼニヤクボ遺跡発掘調査概要報告……167

奈良市教育委員会編集・発行の埋蔵文化財関係刊行物一覧（昭和54年度～平成19年度発行分）……205

第　1　章　　平成17年度埋蔵文化財調査概要報告

第１章　平成17年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告　例言

1．本章は平成17年度に奈良市教育委員会が実施した発掘調査の概要をまとめた報告である。

2．各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。
ＨＪ　平城京跡　　ＤＡ　大安寺旧境内　　ＧＧ　元興寺旧境内　　ＳＤ　西大寺旧境内
ＳＲ　西隆寺旧境内　　ＴＩ　東市跡推定地　　ＮＲ　奈良町遺跡　ＨＫ　東紀寺遺跡
ＦＪ　古市城跡　ＵＡ 歌姫赤井谷遺跡　ＢＴ 別所辻堂遺跡　ＢＳ 別所下ノ前遺跡

3．古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

4．本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。
ＳＡ（柱列・塀）　ＳＢ（掘立柱建物）　ＳＤ（溝・濠・溝状遺構・暗渠）　ＳＥ（井戸）
ＳＦ（道路）　ＳＫ（土坑）　ＳＸ（その他）
また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

5．本文中に示した過去の調査の実施機関は、調査次数の前に下記の略記号を使用し表記した。
国　－　独立行政法人奈良文化財研究所（旧 奈良国立文化財研究所含む）
県　－　奈良県教育委員会　および　奈良県立橿原考古学研究所
市　－　奈良市教育委員会

6．本報告で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。
奈良時代　軒瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』　奈良市教育委員会　1996
鬼瓦：毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦　－８世紀を中心として－」
『研究論集Ⅳ』　奈良国立文化財研究所　1980
土器：『平城宮発掘調査報告書ＸＩ』　奈良国立文化財研究所　1982
古墳時代　須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
弥生時代　土器：奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』2003

7．発掘区位置図については、奈良市発行の1/2500の「大和都市計画図」を、また調査地位置図については、国土地理院発行の1/25000の地形図を利用した。

8．本文中において示した、位置の表示値は、測量法改正（2002年４月）以前の平面直角国土座標体系第Ⅵ系の数値である。

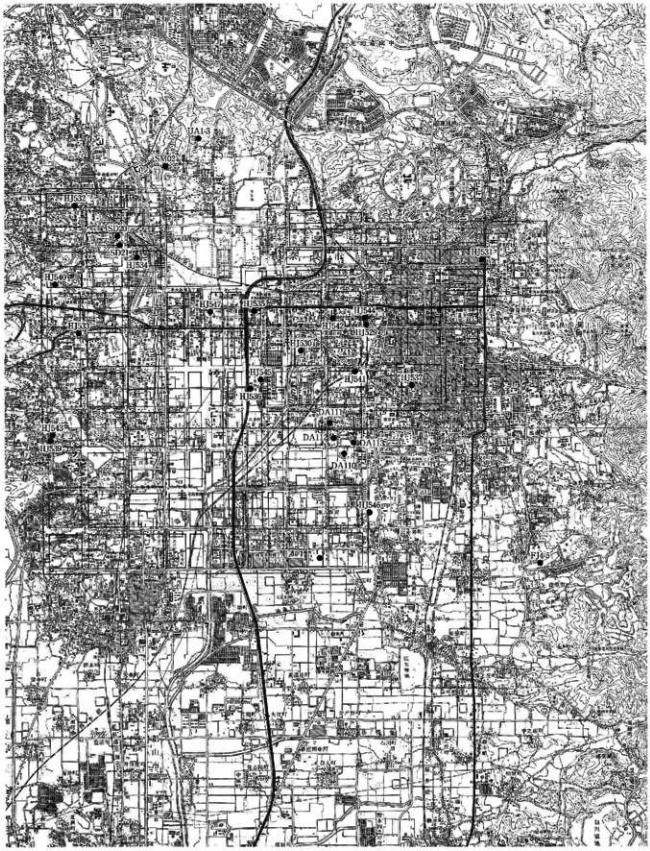
9．本章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した奈良市教育委員会生涯学習部文化財課職員と平成19年度臨時職員 渡辺和仁（奈良大学大学院生）が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。

10．この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

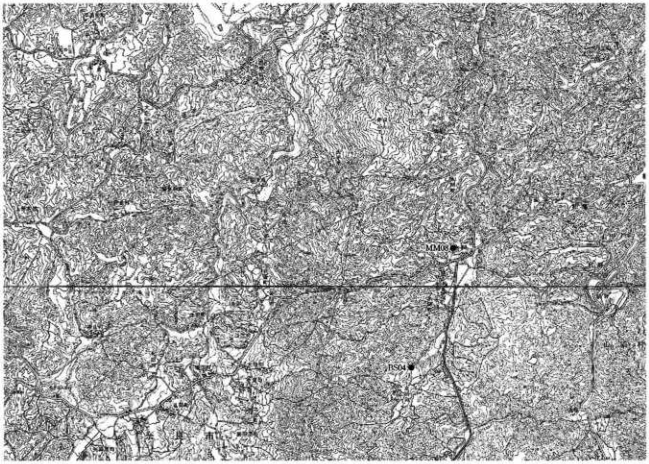
平成17(2005)年度　奈良市教育委員会実施　埋蔵文化財発掘調査一覧

No.	調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者	届出（申請）者	事業内容	事業区分	届出（申請）番号
1	HJ529次	平城京跡（東四坊大路）・油坂遺跡	大宮町二丁目125-5他	2005/5/9～6/14	212㎡	秋山・久保田・山前	奈良市長	大和都市計画街路事業（芝辻大森線）	公共	H10.3011
2	HJ530次	平城京跡（左京四条二坊六坪）	三条栄町161-1他	2005/5/9～5/18	110㎡	池田亜・武田・松田	（株）栄共住宅（株）オークホーム	宅地造成	原因者	H16.3384
3	HJ531次	平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡	今小路町7-1他	2005/5/16～7/21	372㎡	中島・武田	個人	共同住宅建設	原因者	H16.3329
4	HJ532次	平城京跡（右京北辺坊四坊三坪）	西大寺宝ヶ丘町737-1他	2005/5/31～7/29	667㎡	久保亜	（株）奥村組	マンション建設	原因者	H17.0207
5	HJ533次	平城京跡（右京四条四坊・西三坊大路）	宝来三丁目815-2	2005/6/13～6/21	14㎡	池田亜	個人	個人住宅新築	緊急	H17.3033
6	HJ534次	平城京跡（右京二条一坊九坪）	西大寺国見町一丁目2137-74	2005/9/1～9/16	100㎡	久保亜	（株）新星和不動産	マンション建設	原因者	H17.3053
7	HJ535次	平城京跡（左京三条二坊三坪）	三条大路一丁目607-3	2005/9/7～9/14	60㎡	武田	個人	貸貸住宅・事務所・個人住宅建設	原因者	H17.3132
8	HJ536次	平城京跡（左京五条二坊二坪・五条条間路）	大安寺町521-1他	2005/9/15～10/8	330㎡	中島・武田	（株）川西建設	ショールーム付修理工場建設	原因者	H17.3162
9	HJ537次	平城京跡（左京五条八坊二坪）	西木辻町5-2	2005/10/3～11/2	400㎡	宮崎・安井	奈良市長	済美小学校校舎建設事業	公共	H17.3180
10	HJ538次	平城京跡（左京九条一坊一・・・一二坪）	東九条町15他	2005/10/17～12/21	1460㎡	久保亜・中島	（宗）真言宗	寺院新築	原因者	H17.3130
11	HJ539次	平城京跡（右京六条四坊十三坪）	六条西三丁目1559-1の一部他	2005/10/17～10/18	10㎡	武田・三好	（株）大陽興産	宅地造成	原因者	H17.3161
12	HJ540次	平城京跡（右京二条四坊十二坪）	菅原町633-4他	2005/10/17～2006/3/16	950㎡	久保亜・安井・大窪	奈良市長	大和都市計画街路事業（大和中央道・菅原工区）	公共	H17.3240
13	HJ541次	平城京跡（左京五条四坊九・十六坪・東四坊大路関東小路）	大森町135-9他	2005/11/1～2006/3/15	1400㎡	宮崎・山前	奈良市長	JR奈良駅周特定土地区画整理事業	公共	H17.3145
14	HJ542次	平城京跡（左京三条四坊四坪）	大宮町三丁目204-7	2006/1/18～2/2	162㎡	武田	（株）宝来住宅	共同住宅建設	原因者	H17.3213
15	HJ543次	平城京跡（右京六条四坊十四坪）	六条西三丁目1480-4の一部他	2006/1/10～3/10	1490㎡	中島・久保亜	個人	宅地造成	原因者	H13.3116
16	HJ544次	平城京跡（左京三条四坊十三坪）・油坂遺跡	大宮町二丁目82-40他	2006/2/23～3/29	176㎡	武田	（株）近鉄不動産	共同住宅建設	原因者	H17.3289
17	HJ545次	平城京跡（左京五条二坊七坪）	大安寺町554-1他	2006/3/9*	40㎡	三好	（株）ファーストホーム	宅地造成	原因者	H17.3386
18	HJ546次	平城京跡（左京八条四坊十四坪）	東九条町722-1他	2006/3/13～3/17	60㎡	三好	（有）やすらぎ住宅	宅地造成	原因者	H17.3199
19	HJ547次	平城京跡（朱雀大路）	三条大路三丁目444-6他	2006/3/20～3/30	48㎡	三好	（株）タジマコーポレーション	展示場新築	原因者	H17.3360
20	DA110次	史跡大安寺旧境内	東九条町1340他	2005/7/19～2006/1/17	1090㎡	松浦	奈良市教育委員会教育長	史跡大安寺旧境内保存整備事業	公共	H17.1004
21	DA111次	史跡大安寺旧境内	大安寺西丁目1042-2他	2005/8/1～8/5	30㎡	武田	個人	個人住宅改築	緊急	H17.1011
22	DA112次	史跡大安寺旧境内	大安寺八幡町1310-3	2005/10/25～11/16	43㎡	池田亜	個人	個人住宅改築	緊急	H17.1003
23	DA113次	史跡大安寺旧境内	大安寺町七ラキ1238-1	2006/2/6～3/9	102㎡	池田亜	芝池水料組合長	芝池改修	緊急	H17.1074
24	SD20次	西大寺旧境内	西大寺南町2405-1他	2005/6/15～9/14	1060㎡	安井	奈良市長	近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業	公共	S63.3056
25	SD21次	西大寺旧境内・平城京跡（一条南大路）	西大寺南町2387-2他	2005/12/15～2006/3/13	460㎡	安井	奈良市長	近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業	公共	S63.3056
26	SM2次	成務陵古墳隠塚ろう骨収拾地	山陵町318-1他	2005/7/5～7/12	28㎡	池田亜	個人	個人住宅新築	緊急	H17.3002
27	UA3次	歌姫赤井谷第3号横穴	歌姫町赤井谷986-2	2005/8/1～10/20	44㎡	池田亜・植野浩三*	奈良市教育委員会教育長	遺跡範囲確認	緊急	…
28	FJ5次	古市観谷遺跡・古市城跡	古市町98-1他	2005/7/11～11/10	1440㎡	山前	奈良市長	古市公園整備事業	公共	H15.3266
29	BS4次	別所下ノ前遺跡	別所町480他	2005/7/14～11/11	1580㎡	鎌方・大窪	奈良県北部農林振興事務所長	県営ほ場整備事業・田原東地区	原因者	H13.3153
30	MM8次	水間遺跡	水間町1052他	2005/11/28～2006/1/13	555㎡	鎌方・大窪	奈良県北部農林振興事務所長	県営ほ場整備事業・田原東地区	原因者	H13.3153

＊奈良大学文学部文化財学科助教授（当時）



平成 17 年度　発掘調査位置図 A　1/50000



平成 17 年度　発掘調査位置図 B　1/50000

1. ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査
平城京跡（左京五条四坊九・十六坪、東四坊坊間東小路）の調査　第541次

Ⅰ. はじめに

奈良市教育委員会では、平成13年度からＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内（総面積14.6万㎡）の発掘調査を実施しており、平成15年度までの３ヵ年度に、10箇所で計5,341㎡の発掘調査を実施している。今年度の調査は平成16年度事業の繰越分で、調査位置は下記の一覧表と位置図の通りである。

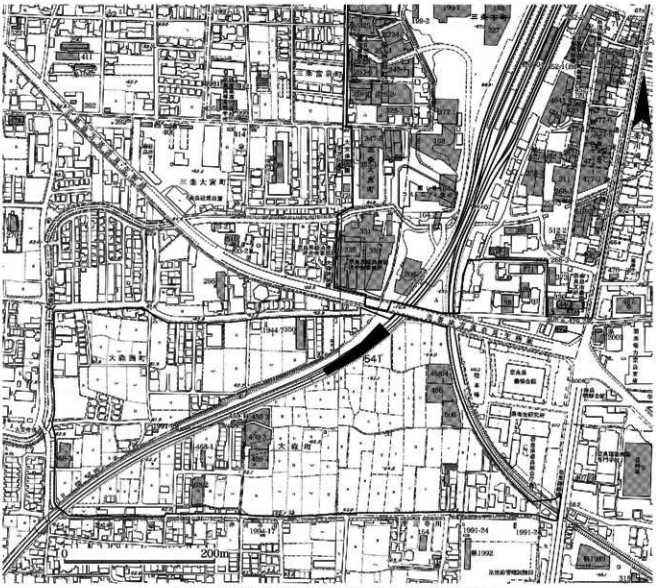
発掘調査は連続立体交差関連公共事業による高架工事に先立ち、ＪＲ関西本線の軌道高架工事部分で実施した。調査は東発掘区（800㎡）と西発掘区（600㎡）に分けて行なった。調査地は平城京の条坊復原では左京五条四坊九坪および十六坪に該当し、発掘区中央には東四坊坊間東小路、北端には四条大路が位置する。これまで、九坪内では坪の北端部でＨＪ第350次、南西隅でＨＪ第459-2次、十六坪内では坪の南東隅でＨＪ第468-4次、ＨＪ第486次の各調査を実施している。今回の調査は、九・十六坪の様相と東四坊坊間東小路の確認を主たる目的として実施した。

報告に用いる遺構記号・番号は、古墳時代以前の遺構には２桁を、奈良時代以降のものには３桁以上の番号を用い、これらの番号は当事業地内で、坪ごとに設定している通し番号とした。

（宮崎正裕）

平成17年度　ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内　発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京跡（左京五条四坊九・十六坪、東四坊坊間東小路）	HJ第541次	連立関連公共施設整備事業	大森町135-9他	H17.11.1～H18.3.15	1,400㎡	宮崎・山前



ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内　発掘調査位置図（1/5000）

Ⅱ. 基本層序

発掘区が北東から南西に細長いため、基本層序は場所により異なる。東発掘区北半では造成土、黒灰色・灰色砂質土、灰色砂質土・灰黄色粘砂と続き、現地表下1.5m前後で旧流路埋土である橙茶灰色粘砂（標高約63.4m）となる。東発掘区南端では造成土、暗灰色砂質土と続き、現地表下1.3m前後で淡黄灰色粘質土の地山（標高約63.4m）となる。西発掘区南端では、造成土直下の現地表下1.1m前後で明黄色粘土あるいは明黄灰色粘砂の地山（標高約63.3m）となる。

なお、東発掘区南端から西発掘区北端にかけては、部分的に黄灰茶色粘砂を主体とする整地土層が0.1m程度の厚さで堆積する。遺構はこの整地土層、旧流路埋土、地山上面に遺存し、遺構検出は旧流路埋土上面、整地土層上面、地山上面で行なった。

東発掘区北半の旧流路は、堆積状況と出土土器の特徴などから、弥生時代後期に埋没したものとみられる。

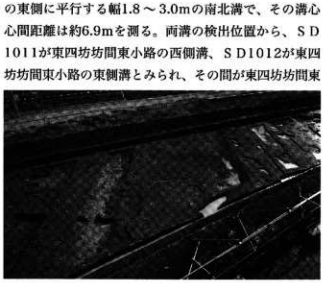
Ⅲ. 検出遺構

検出遺構には弥生時代と奈良・平安時代のものがあり、各遺構の概要は、次頁以下の遺構一覧表の通りである。

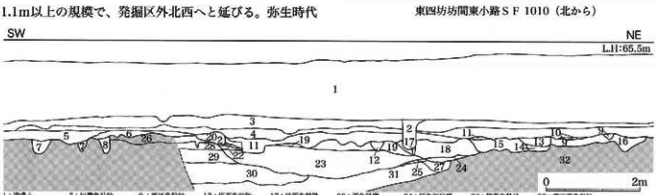
東発掘区で検出した土坑ＳＫ02は南北・東西ともに、1.1m以上の規模で、発掘区外北西へと延びる。弥生時代中期末～後期初頭の弥生土器甕・高杯の小片が出土した。

奈良・平安時代の遺構には、東四坊坊間東小路とその両側溝、それと平行する南北溝、坪内を区画する溝、掘立柱塀・建物、井戸、土坑がある。以下、東四坊坊間東小路に関連する条坊遺構、九坪内の遺構、十六坪内の遺構の順で報告する。

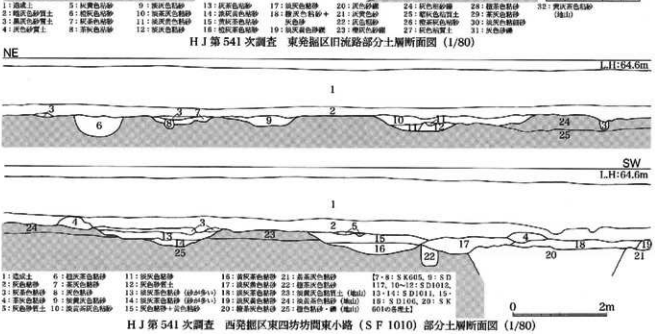
条坊遺構　西発掘区で検出したＳＤ1011は、幅1.6～2.2m、深さ0.3mの南北溝である。ＳＤ1012はその東側に平行する幅1.8～3.0mの南北溝で、その溝心間距離は約6.9mを測る。両溝の検出位置から、ＳＤ1011が東四坊坊間東小路の西側溝、ＳＤ1012が東四坊坊間東小路の東側溝とみられ、その間が東四坊坊間東



東四坊坊間東小路ＳＦ 1010（北から）



ＨＪ第 541 次調査　東発掘区旧流路部分土層断面図（1/80）



ＨＪ第 541 次調査　西発掘区東四坊坊間東小路（ＳＦ 1010）部分土層断面図（1/80）

小路の路面（ＳＦ1010）に相当する。ＳＦ1010は路面幅が約５ｍで、標高が63.4ｍ前後である。路面心の国土座標値はＸ=-147,135.0、Ｙ=-16,588.2となる。

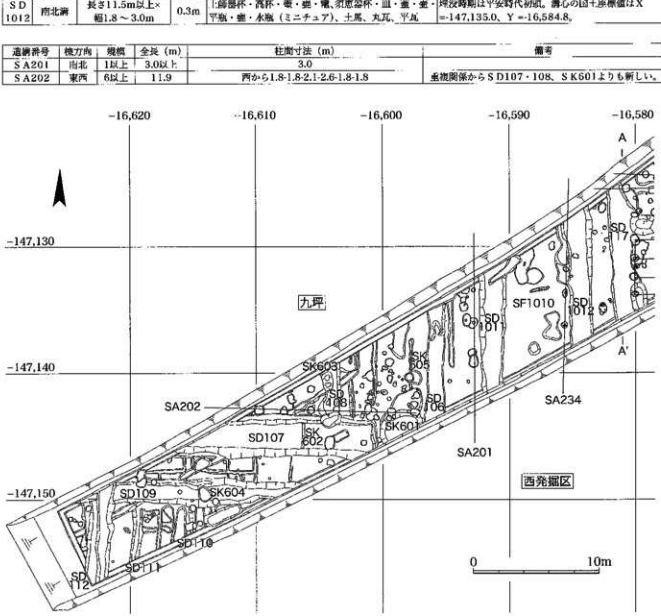
九坪内の遺構　奈良時代の溝７条、掘立柱塀２条、土坑５基がある。

ＳＤ106は、前述の東四坊坊間東小路の西側溝ＳＤ1011と平行する南北溝である。重複関係から土坑ＳＫ601よりも新しい。ＳＤ106とＳＤ1011の間には南北塀ＳＡ201があり、九坪の東端を限る。また、この部分で検出した東西約1.5ｍ間隔の小柱穴２箇所は、築地塀添柱穴ともみられる。ＳＤ107は幅3.5ｍ、深さ0.6ｍの東西溝で、南北溝ＳＤ108が繋がる。ＳＤ107は東端から６ｍ以西は0.1ｍ程度深くなる。ＳＡ202はＳＤ107のすぐ北側で検出した東西塀で、重複関係からＳＤ107・108、ＳＫ601よりも新しい。ＳＤ109はＳＤ107の南約２ｍで検出した東西溝で、溝底は西に下り、発掘区外西に延びる。ＳＤ109には南北溝ＳＤ110・111が繋がる。ＳＤ112は発掘区の西端で検出した幅2.0ｍ、深さ0.6ｍの南北溝で、溝底は北に下り、発掘区外北に延びる。ＳＤ112は上層と下層に分かれる。下層の埋没はＳＤ109の掘削に先行し、上層はＳＤ109と同時期に埋没する。ＳＤ107からＳＤ109の間は、九坪内の南北およそ1/2に相当し、ＳＤ112は九坪内の東端からおよそ1/4に位置する。

ＨＪ第541次調査　条坊関係検出遺構（道路側溝）（上）・九坪内検出遺構（掘立柱塀）（下）・一覧表

遺構番号	平面形	掘形 平面規模	深さ	主な出土遺物	備考
ＳＤ1011	南北溝	長さ10.5ｍ以上×幅1.6～2.2ｍ	0.3ｍ	土師器杯・皿・高杯・椀・須恵器杯・蓋・鉢・壺・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦	埋没時期は平安時代初頭。溝心の国土座標値はＸ=-147,135.0、Ｙ=-16,591.7。
ＳＤ1012	南北溝	長さ11.5ｍ以上×幅1.8～3.0ｍ	0.3ｍ	土師器杯・高杯・壺・甕・鍋、須恵器杯・皿・蓋・壺・平瓶・甕・水瓶（ミニチュア）、土馬、丸瓦、平瓦	埋没時期は平安時代初頭。溝心の国土座標値はＸ=-147,135.0、Ｙ=-16,584.8。

遺構番号	検出角	規模	全長（ｍ）	柱間寸法（ｍ）	備考
ＳＡ201	南北	1以上	3.0以上	3.0	
ＳＡ202	東西	6以上	11.9	西から1.8-1.8-2.1-2.6-1.8-1.8	重複関係からＳＤ107・108、ＳＫ601よりも新しい。



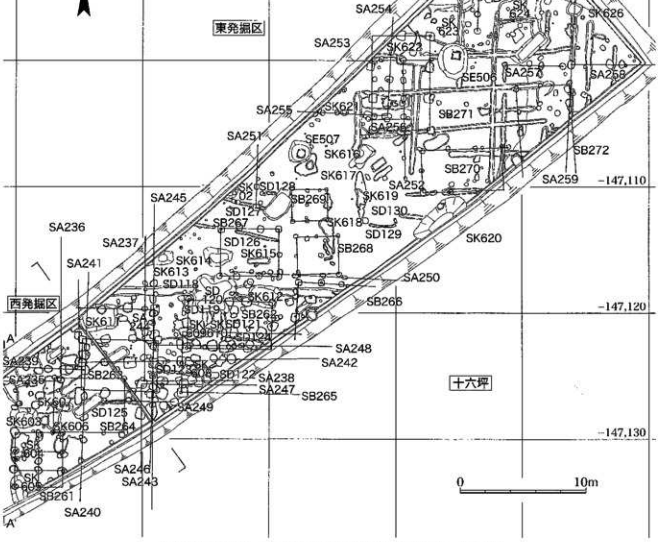
ＨＪ第541次調査　西発掘区遺構平面図（1/300）

十六坪内の遺構　奈良・平安時代の溝15条、掘立柱塀27条、掘立柱建物12棟、井戸2基、土坑24基がある。

なお、後述のＳＤ117以東およびＳＤ118以南の掘立柱塀・建物の大半は、前述の整地土層上面で検出した。この整地土層中には、奈良時代後半の土器が含まれる。

ＳＤ117は、整地上層下の地山上面で検出した南北溝で、東四坊坊間東小路の東側溝ＳＤ1012と平行する。十六坪西端の南北棟建物ＳＢ261と東西塀ＳＡ235は、ＳＤ117が埋った後に建てられる。ＳＤ118は、整地上層下の地山上面で検出した東西溝で、溝底は西に下る。埋土から奈良時代後半の土器が大量に出土した。ＳＤ118は十六坪内の北端からおよそ1/4に位置する。また、ＳＤ118の南側と北側とでは、遺構密度が大きく変わることから、 坪内を南北に区画する溝とみられる。ＳＤ118の南側に点在するＳＤ119～124は、すべて整地土層下の地山上面で検出した。

南北溝ＳＤ117の東側で、東西溝ＳＤ118の南側部分には掘立柱塀とみられる柱列で区画された時期が複数ある。まず、南北塀ＳＡ243と東西塀ＳＡ244でＬ字形に区画される。つぎにＳＡ234を踏襲した南北塀ＳＡ246と東西塀ＳＡ247でＬ字形に区画される。この時期までは、これらの塀で区画された範囲には掘立柱建物は確認できない。その後、南北塀ＳＡ236・237とそれに繋がる東西塀ＳＡ235・238が東西対称な位置に配される。この時期には、ＳＡ237とＳＡ238で区画された北東側にＳＢ262が建てられ、ＳＡ235の南側に南北塀ＳＡ241と東西塀ＳＡ242でＬ字形に区画され、その北東側にＳＢ268～270・272が建てられる。

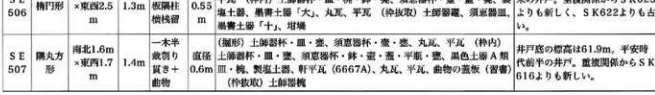


ＨＪ第541次調査　西発掘区（東端）・東発掘区遺構平面図　(1/300)

ＨＪ第541次調査　九坪内検出遺構（溝・土坑）・十八坪内検出遺構（井戸）一覧表

遺構番号	掘形 平面形	掘形 平面規模（m）	掘形 深さ（m）	主な出土遺物	備考
ＳＤ106	南北溝	長さ10.3以上×幅1.4～1.7	0.1～0.3	土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・壺、鍛造土器、丸瓦、平瓦	出土土器の時期不明。溝心の国土座標値はＸ=-147,135.0、Ｙ=-16,596.2。
ＳＤ107	東西溝	長さ16.0×幅3.5	0.6	サヌカイト剥片、土師器杯・皿・鉢・高杯・壺・蓋・甕・竈・高杯（ミニチュア）、須恵器杯・杯蓋・皿・鉢・壺・蓋・平瓶・甕、製塩土器、線刻土器、丸瓦、平瓦	埋没時期は奈良時代末。重複関係からＳＫ601・602よりも新しく、ＳＡ202よりも古い。ＳＤ108に繋がる。溝心の国土座標値はＸ=-147,144.9、Ｙ=-16,609.0。
ＳＤ108	南北溝	長さ4.5×幅2.0	0.1～0.2	土師器壺、須恵器杯・蓋・横瓶・壺、丸瓦、平瓦	出土土器の時期不明。重複関係からＳＫ603よりも新しい。ＳＤ107に繋がる。
ＳＤ109	東西溝	長さ15.0×幅2.0	0.4	サヌカイト剥片、土師器杯・皿・高杯・蓋・甕・竈、須恵器杯・杯蓋・皿・鉢・壺・蓋・平瓶・壺、鍛造土器、丸瓦、平瓦	埋没時期は奈良時代後半。重複関係からＳＫ604よりも新しく、ＳＤ112と同時期に埋没。ＳＤ110・111に繋がる。溝心の国土座標値はＸ=-147,149.4、Ｙ=-16,609.0。
ＳＤ110	南北溝	長さ2.7×幅0.6	0.2	土師器甕	出土土器の時期不明。ＳＤ109に繋がる。
ＳＤ111	南北溝	長さ4.5×幅0.7	0.3	土師器杯・皿・壺・甕、須恵器杯・鉢・甕	出土土器の時期不明。ＳＤ109に繋がる。
ＳＤ112	南北溝	長さ8.2×幅2.0	0.6	土師器杯・甕、須恵器杯・皿・鉢・蓋・甕	出土土器の時期不明。重複関係から、下層の埋没はＳＤ109の掘削に先行し、上層はＳＤ109と同時期に埋没。溝心の国土座標値はＸ=-147,149.4、Ｙ=-16,622.0。
ＳＫ601	不整形	南北4.2以上×東西3.5以上	1.4以上	土師器杯・皿・蓋・甕、須恵器杯・皿・壺・蓋・甕	湧水が激しく発掘を断念。出土土器の時期不明。重複関係からＳＡ202、ＳＤ107よりも古い。
ＳＫ602	隅丸方形	南北1.0×東西0.8	0.2	出土遺物無	重複関係からＳＤ107よりも古い。
ＳＫ603	南北溝状	南北1.8×東西1.2	0.7	出土遺物無	重複関係からＳＤ108よりも古い。
ＳＫ604	不整形	南北1.7×東西2.0	0.2	土師器、須恵器杯・壺・甕	重複関係からＳＤ109よりも古い。
ＳＫ605	不整形	南北1.2×東西1.4	0.1	土師器杯、須恵器杯	

遺構番号	掘形 平面形	掘形 平面規模	掘形 深さ	井戸枠 構造	井戸枠 内法	主な出土遺物	備考
ＳＥ506	楕円形	南北3.0m×東西2.5m	1.3m	方形縦板隅柱横桟留	一辺0.55m	（掘形）土師器杯・皿・鉢・高杯・甕、須恵器杯・壺・蓋・甕、丸瓦、平瓦　（枠内）土師器杯・皿・椀・鉢・甕、須恵器杯・壺・蓋・甕、鍛造土器、墨書土器「大」、丸瓦、平瓦　（枠抜取）土師器甕、須恵器皿、鍛造土器「十」、瑞獣	井戸底の標高は62.1m。奈良時代末の井戸。重複関係からＳＫ623よりも新しく、ＳＫ622よりも古い。
ＳＥ507	隅丸方形	南北1.6m×東西1.7m	1.4m	一本平欅割り貫き＋曲物	直径0.6m	（掘形）土師器杯・皿・壺、須恵器杯・壺・甕、丸瓦、平瓦　（枠内）土師器杯・皿・甕、須恵器杯・鉢・壺・蓋・平瓶・甕、黒色土器A類皿・椀、製塩土器、軒平瓦（6667A）、丸瓦、平瓦、曲物の蓋板（習書）（枠抜取）土師器椀	井戸底の標高は61.9m。平安時代前半の井戸。重複関係からＳＫ616よりも新しい。



1：橙茶色粘砂
2：明黄灰色粘砂
3：淡灰茶色砂質土
4：淡灰茶色粘砂
5：黄茶灰色粘砂
6：黄茶色粘砂＋灰色砂
7：淡黄灰色粘細砂
8：淡茶灰色粘質土
9：黄橙灰色砂質土（地山）
10：淡青灰色粘細砂（地山）

1：造成土
2：暗灰色砂質土
3：灰茶色砂質土
4：淡茶灰色砂質土
5：黄灰色粘砂
6：黄灰茶色粘砂
7：茶灰色粘質土
8：淡灰黄色粘砂
9：暗灰茶色粘砂
10：淡灰茶色粘砂
11：淡灰色粘質土
12：淡黄灰色粘質土（地山）
13：淡黄灰色粘砂（地山）
【4：ＳＫ613、6：整地土層、7：ＳＤ118、9・10：ＳＫ611の各堰上】

ＨＪ第541次調査　西発掘区ＳＤ107・109土層断面図（1/50）（上）・東発掘区上層断面図（1/50）（下）

ＨＪ第541次調査　十六坪内検出遺構（掘立柱塀・建物）一覧表

遺構番号	棟方向	規模 桁行（南北）×梁行（東西）	桁行（南北） 全長（m）	梁行（東西） 全長（m）	柱間寸法（m） 桁行（南北）	柱間寸法（m） 梁行（東西）	備考
ＳＡ234	南北	2以上	4.5以上		北から1.8-2.7		重複関係からＳＤ1012よりも古い。
ＳＡ235	東西	2以上	4.2以上		2.1等間		重複関係からＳＤ117よりも新しい。ＳＡ236に繋がる。建物の南側柱の可能性あり。
ＳＡ236	南北	2以上	4.0以上		2.0等間		重複関係からＳＫ607よりも新しい。ＳＡ235に繋がる。建物の東側柱の可能性あり。
ＳＡ237	南北	4以上	7.6以上		南から1.8-1.8-2.0-2.0		重複関係からＳＡ246よりも新しい。ＳＡ238に繋がる。
ＳＡ238	東西	3以上	5.2以上		西から1.5-2.4-1.3		重複関係からＳＤ123、ＳＡ247よりも新しい。ＳＡ237に繋がる。
ＳＡ239	東西	3以上	4.8以上		東から1.2-1.8-1.8		ＳＡ240に繋がる。
ＳＡ240	南北	5以上	9.6以上		南から1.8-1.8-1.5-2.1-2.4		重複関係からＳＢ263よりも古い。ＳＡ239に繋がる。
ＳＡ241	南北	1以上	2.1以上		2.1		重複関係からＳＢ263よりも古い。
ＳＡ242	東西	6以上	12.1以上		西から2.0-2.0-2.4-2.7-1.5-1.5		重複関係からＳＡ243よりも新しい。
ＳＡ243	南北	4以上	8.4以上		2.1等間		重複関係から整地土層、ＳＡ245、ＳＢ263よりも古い。ＳＡ244に繋がる。
ＳＡ244	東西	2以上	4.2以上		2.1等間		重複関係からＳＫ611、整地土層よりも古い。ＳＡ243に繋がる。
ＳＡ245	南北	5以上	12.0以上		2.4等間		重複関係からＳＡ243よりも新しく、ＳＫ613よりも古い。ＳＡ248に繋がる。
ＳＡ246	南北	1以上	2.4以上		2.4		重複関係からＳＡ237よりも古い。ＳＡ247に繋がる。建物の西側柱の可能性あり。
ＳＡ247	東西	3以上	4.5以上		西から1.5-1.8-1.2		重複関係からＳＤ123よりも新しく、ＳＡ238よりも古い。ＳＡ246に繋がる。建物の北側柱の可能性あり。
ＳＡ248	東西	3以上	7.5以上		西から2.1-2.7-2.7		重複関係からＳＢ262よりも新しい。ＳＡ245に繋がる。
ＳＡ249	東西	3以上	6.0以上		西から2.1-2.1-1.8		重複関係からＳＡ245よりも新しく、ＳＤ263よりも古い。
ＳＡ250	東西	6以上	10.8以上		西から1.5-1.5-2.1-2.1-1.8-1.8		重複関係からＳＢ268よりも新しい。
ＳＡ251	南北	2以上	3.4以上		1.7等間		重複関係からＳＤ127よりも新しい。
ＳＡ252	南北	6	9.4		北から1.7-1.5-1.3-1.5-1.7-1.7		重複関係からＳＫ621よりも古い。
ＳＡ253	東西	2以上	3.9以上		東から2.1-1.8		重複関係からＳＫ622よりも新しい。
ＳＡ254	南北	3以上	5.1以上		南から1.5-1.5-2.1		重複関係からＳＡ255、ＳＫ621よりも古い。
ＳＡ255	東西	3以上	5.1以上		東から1.5-1.8-1.8		重複関係からＳＡ255よりも古い。
ＳＡ256	東西	2	3.2		1.6等間		重複関係からＳＡ254・255よりも新しい。
ＳＡ257	東西	2	4.5		東から2.7-1.8		
ＳＡ258	東西	1以上	3.0以上		3.0		ＳＡ259に繋がる。
ＳＡ259	南北	2以上	6.0以上		3.0等間		重複関係からＳＢ272よりも古い。ＳＡ258に繋がる。
ＳＡ260	南北	2	2.8		1.4等間		
ＳＢ261	南北	3×2	4.5	3.6	1.5等間	1.8等間	重複関係からＳＤ117、ＳＫ604・605よりも新しい。
ＳＢ262	東西	4×2	6.3	3.6	＊	1.8等間	桁行柱間寸法は、西から1.5-1.5-1.5-1.8。重複関係からＳＡ248、ＳＢ265よりも古い。
ＳＢ263	東西	3×2	6.3	4.2	2.1等間	2.1等間	重複関係からＳＤ123、ＳＡ240・241・242・243よりも新しい。
ＳＢ264	東西	3×2	5.5	4.2	＊	2.1等間	桁行柱間寸法は、西から2.0-2.0-1.5。重複関係からＳＫ607よりも新しい。
ＳＢ265	東西	4以上×2	8.4以上	4.8	2.1等間	2.4等間	重複関係からＳＡ247よりも新しい。
ＳＢ266	不明	(1以上)×(2以上)	(2.7以上)	(3.2以上)	2.7	＊	東西柱間寸法は、西から1.8-1.5。
ＳＢ267	東西	3×2	4.5	3.6	1.5等間	1.8等間	重複関係からＳＤ126よりも新しく、ＳＫ614よりも古い。
ＳＢ268	不明	(2)×(2)	3.0	3.3	1.5	＊	東西柱間寸法は、西から1.5-1.8。重複関係からＳＡ250よりも古い。
ＳＢ269	不明	(2)×(2)	2.4	2.7	1.2等間	＊	東西柱間寸法は、西から1.2-1.5。重複関係からＳＫ617・618よりも古い。
ＳＢ270	東西	3×2	6.3	3.2	2.1等間	1.6等間	北側柱柱穴から、新平瓦（6668A）が出土。
ＳＢ271	南北	3×2	7.2	4.8	2.4等間	2.4等間	重複関係からＳＫ621・622よりも新しい。
ＳＢ272	南北	3以上×2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間	西側柱柱穴から、緑釉陶器蓋が出土。重複関係からＳＡ259よりも新しい。

ＨＪ第541次調査　十六坪内検出遺構（溝・土坑）一覧表

遺構番号	形態 平面形	形態 平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備考
ＳＫ02	不整形	南北1.1以上×東西1.1以上	0.75	弥生土器高杯・甕	底が平坦な、弥生時代後期初頭の土坑。
ＳＤ117	南北溝	長さ11.0以上×幅1.8～3.0	0.1～0.3	土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕、漆瘡（土師器壺）、製塩土器、土馬、平瓦、フイゴ羽口	重複関係から整地土層、ＳＡ235、ＳＢ261、ＳＫ603・604・605よりも古い。溝心の国土座標値はＸ＝147,135.0、Ｙ＝16,581.4。
ＳＤ118	東西溝	長さ19.3以上×幅0.6	0.2～0.3	古墳時代須恵器杯身、土師器杯・皿・椀・高杯・壺・甕、須恵器杯・皿・鉢・壺・蓋・横瓶・甕・壺（線付壺）、製塩土器	埋没時期は奈良時代後半。重複関係からＳＫ612よりも新しく、整地土層よりも古い。溝心の国土座標値はＸ＝147,118.2、Ｙ＝16,569.0。
ＳＤ119	南北溝	長さ1.2以上×幅0.4	0.1	弥生土器、土師器、須恵器杯	重複関係から整地土層、ＳＫ610よりも古い。
ＳＤ120	南北溝	長さ0.8以上×幅0.3	0.05	土師器	重複関係から整地土層、ＳＫ610よりも古い。
ＳＤ121	南北溝	長さ3.7以上×幅0.5	0.1	弥生土器壺、土師器、須恵器	南端でＳＤ122に繋がる。重複関係から整地土層、ＳＡ248、ＳＢ262よりも古い。
ＳＤ122	蛇行	長さ1.3以上×幅0.3	0.05	須恵器杯	北端でＳＤ121に繋がる。重複関係から整地土層、ＳＡ238よりも古い。
ＳＤ123	東西溝	長さ3.3以上×幅0.3	0.05	出土遺物無	重複関係から整地土層、ＳＡ238・247、ＳＢ263よりも古い。
ＳＤ124	東西溝	長さ3.0以上×幅0.2	0.05	出土遺物無	重複関係から整地土層、ＳＤ121、ＳＢ265よりも古い。
ＳＤ125	東西溝	長さ3.3以上×幅0.4	0.1	土師器	重複関係からＳＡ249よりも新しい。
ＳＤ126	東西溝	長さ3.6以上×幅0.3	0.05	出土遺物無	重複関係からＳＢ267よりも古い。
ＳＤ127	東西溝	長さ3.8以上×幅0.3	0.05	出土遺物無	重複関係からＳＡ251よりも古い。
ＳＤ128	東西溝	長さ0.9以上×幅0.3	0.05	須恵器杯蓋	
ＳＤ129	東西溝	長さ2.2以上×幅0.2	0.05	土師器皿、須恵器椀	
ＳＤ130	東西溝	長さ4.3以上×幅0.3	0.1	土師器杯、須恵器杯・皿	重複関係からＳＫ620よりも新しい。
ＳＤ131	蛇行	長さ3.5以上×幅0.3	0.1	土師器杯	
ＳＫ603	隅丸方形	南北1.6×東西2.0	0.15	土師器、須恵器杯・甕、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＤ117よりも新しい。
ＳＫ604	不整形	南北2.0×東西1.5	0.45	土師器、須恵器	重複関係からＳＤ117よりも新しく、ＳＢ261よりも古い。
ＳＫ605	楕円形	南北2.3以上×東西1.3	0.4	土師器、須恵器、平瓦	重複関係からＳＤ117よりも新しく、ＳＢ261よりも古い。
ＳＫ606	不整形	南北1.3×東西1.1	0.1	土師器	重複関係からＳＫ607よりも古い。
ＳＫ607	不整形	南北0.8×東西2.0	0.1	須恵器壺	重複関係からＳＢ263・264よりも古い。
ＳＫ608	東西溝状	南北0.5×東西1.7	0.1	土師器杯・高杯、須恵器壺・甕	重複関係からＳＡ242、ＳＢ265よりも古い。
ＳＫ609	東西溝状	南北0.7×東西1.5	0.05	土師器	重複関係からＳＢ265よりも古い。
ＳＫ610	楕円形	南北0.9×東西1.2	0.1	土師器杯蓋、須恵器甕	重複関係からＳＤ119・120、ＳＢ265よりも古い。
ＳＫ611	隅丸方形	南北2.0×東西3.0	0.25	土師器椀・皿、須恵器杯・杯蓋・皿・壺・甕、製塩土器、転用風（須恵器杯・杯蓋）、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＡ244よりも新しく、整地土層よりも古い。
ＳＫ612	不整形	南北1.8×東西2.7	0.5	古墳時代土師器高杯、土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器皿・鉢・蓋、製塩土器	重複関係からＳＤ118、ＳＢ262よりも古い。
ＳＫ613	隅丸方形	南北1.1×東西2.6以上	0.2	土師器皿、須恵器杯・甕	
ＳＫ614	不整形	南北1.5×東西2.3	0.5	弥生土器、土師器、須恵器	重複関係からＳＢ267よりも新しい。
ＳＫ615	隅丸方形	南北0.5×東西1.8	0.4	土師器、古墳時代須恵器杯身	
ＳＫ616	不整形	南北2.8以上×東西2.8	0.2	土師器、須恵器杯	重複関係からＳＥ507よりも古い。
ＳＫ617	不整形	南北1.4×東西0.7	0.15	土師器皿	重複関係からＳＢ269よりも新しい。
ＳＫ618	不整形	南北2.9×東西1.3	0.1	土師器、須恵器	重複関係からＳＢ269よりも新しい。
ＳＫ619	楕円形	南北3.6×東西1.0	0.2	土師器鍋、須恵器杯・甕、平瓦	
ＳＫ620	不整形	南北3.5以上×東西4.2以上	0.8	弥生土器、土師器、須恵器杯、製塩土器、平瓦	重複関係からＳＤ130よりも古い。
ＳＫ621	東西溝状	南北0.7～1.7×東西4.5	0.1	土師器椀・高杯、須恵器杯・杯蓋・皿・壺・甕、黒色土器Ａ類椀、製塩土器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＡ252・254よりも新しく、ＳＢ271よりも古い。
ＳＫ622	東西溝状	南北0.4～1.5×東西4.0	0.15	サヌカイト剥片、土師器甕・鍋、須恵器杯・壺・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＥ506よりも新しく、ＳＡ253よりも古い。
ＳＫ623	不整形	南北3.2×東西2.4	0.1	土師器、須恵器、製塩土器	重複関係からＳＢ271、ＳＥ506よりも古い。
ＳＫ624	Ｌ字形	南北3.7以上×東西3.5	0.1～0.3	弥生土器、土師器高杯、須恵器杯・杯蓋・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦	西半に比べ、東半は深い。
ＳＫ625	不整形	南北2.3以上×東西1.5以上	0.1	土師器	重複関係からＳＫ626よりも古い。
ＳＫ626	隅丸方形	一辺1.0	0.6	土師器甕、須恵器杯・杯蓋・壺、製塩土器、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＫ625よりも新しい。

十六坪東端の井戸ＳＥ506は方形縦板隅柱横桟留の枠をもつもので、枠が一部抜き取られている。枠内から奈良時代末の土器が出土した。重複関係から土坑ＳＫ623よりも新しく、ＳＫ622よりも古い。ＳＥ506の西側には、南北棟建物ＳＢ271、東西塀ＳＡ253が建てられる。ＳＥ506の東側にはＳＡ253と柱筋を揃えて東西塀ＳＡ257・258が建てられる。ＳＡ258は西端で南北塀ＳＡ259に繋がる。

井戸ＳＥ507は一木半裁刳り貫きの枠で、枠が一部抜き取られている。枠は高さ0.9～1.1m分が遺存し、井戸底に曲物を据えている。曲物内から、習書された曲物の蓋板が出土した。枠内の出土土器は奈良時代末～平安時代初頭のものが主体を成すが、曲物内からは9世紀後半の黒色土器Ａ類皿（1点）が出土している。重複関係から土坑ＳＫ616よりも新しい。（宮崎正裕）

Ⅳ. 出土遺物

弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺物が遺物整理箱で48箱分出土した。

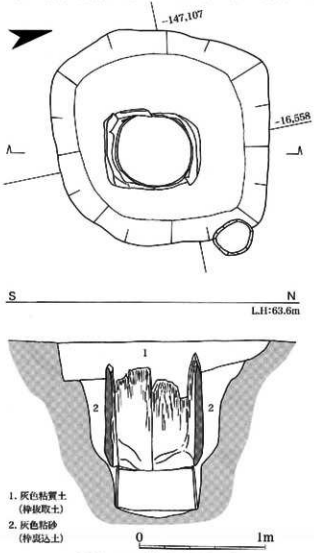
弥生時代の遺物には、弥生土器（壷・甕・高杯）と、サヌカイト製の石鏃（1点）と剥片（27点）があり、遺物整理箱で0.5箱分出土している。弥生土器はすべて破片で、主にＳＫ02および旧流路から出土した弥生時代中期末～後期初頭のものである。

古墳時代の遺物には、土師器と須恵器の小片が少量あり、奈良時代の遺構および遺物包含層から出土している。

奈良・平安時代の遺物には土器類、瓦類、木製品などがある。このうち、土器類は遺物整理箱で35箱分あり、内訳は土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器、墨書土器、線刻土器、硯、ミニチュア土器、土馬などで、主に坪内の区画溝や井戸などから出土している。奈良時代後半～末にかけての土師器、須恵器が中心を占める。緑釉陶器は蓋の破片で、ＳＢ272の柱穴から、灰釉陶器は小片で、遺物包含層から出土した。製塩土器は遺物整理箱で1箱分あり、墨書土器は11点ある。瓦類は遺物整理箱で10箱分出土し、内訳は丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、埼である。出土の大半は奈良時代の丸瓦と平瓦で、丸瓦が198点（19,567ｇ）、平瓦が482点（48,749ｇ）、丸瓦か平瓦のいずれか不明が191点（2,799g）である。型式不明の軒丸瓦がＳＤ109から、軒平瓦6668ＡがＳＢ270の柱穴から、同6667ＡがＳＥ507枠内から各1点出土した。埼はＳＥ506・507枠内から各1点出土した。木製品には、習書した曲物の蓋板（直径186×厚さ4mm）が、ＳＥ507枠内から2点（1個体）出土した。その他には、坩堝（5点）、フイゴ羽口（1点）、鉱滓、炭化物、植物種がある。

以下、出土量の大半を占める井戸ＳＥ506・507、東西溝ＳＤ107から出土した土器の概要を記す。

ＳＥ506からは、土師器杯Ａ（7）・杯Ｂ、皿Ａ・皿Ｂ・皿Ｃ（1）・椀Ａ（2～4）・高杯・鉢・甕、須恵器杯蓋（5・6）・杯Ａ（8）・杯Ｂ（9～13）・皿Ｃ（14）・壺・壷Ｇ（15）・甕が出土している。2～4は内面、口縁部外面をヨコナデし、体部外面をヘラケズリで調整する。ヨコナデの方向は時計回りである。4は底部外面に



井戸 SE507 平面・立面図（1/30）

井戸ＳＥ507（東から）

「大」の墨書がある。5・6は外面に重ね焼きの痕がある。5は内面に灰が降下しており、内面を上に向けて置いていたことがわかる。8は口縁部に粘土紐を巻きあげた痕が明瞭に残り、口縁部と底部の境をロクロケズリし、東海産の須恵器に類似する。9～13は口径16.7～18.2㎝、器高4.8～6.0㎝である。色調は青灰色～暗青灰色で、口縁部内外面をロクロナデで、底部外面をナデで調整する。12・13は高台に重ね焼きの痕がある。15は底部外面に回転糸切りの痕がみられ、頸部と体部は2段接合である。1～8、12・13・15が枠内、6・9～11・14が枠抜取から出土している。

ＳＥ507からは、土師器杯・皿Ｃ（17）・椀Ｄ（16）・甕、須恵器杯蓋・杯Ａ（18）・杯Ｂ・皿・壺（19）・平瓶・甕、黒色土器皿（20）・杯（21）・椀（22）が出土している。17は口縁端部に煤が付着しており、灯明皿に用いられたと思われる。18は箱形をし、胎土中に黒色微粒子を多く含む。口縁部外面に重ね焼きの痕がある。19は灰白色で、軟質の焼き上がりである。黒色土器（20～22）は、いずれも内面、口縁部外面に炭素を吸着させたＡ類である。内面、口縁部外面をヘラミガキで、口縁部外面をヘラケズリで調整する。21は内面に螺旋暗文が施される。20～22が枠内、16～19が枠抜取から出土している。

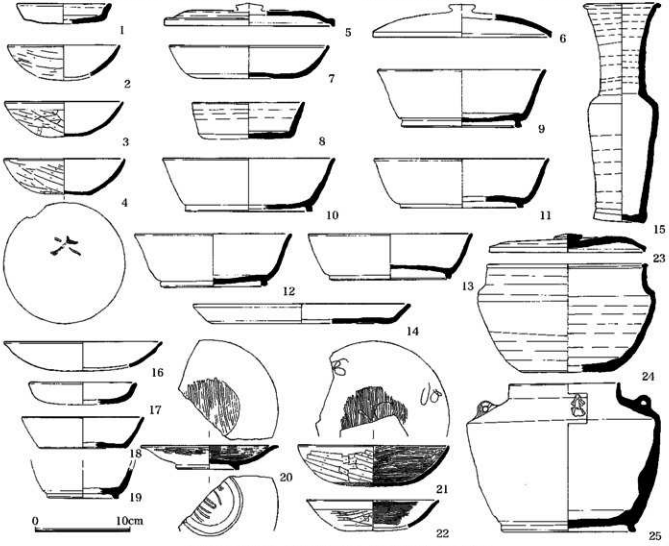
ＳＤ107からは、土師器杯蓋・杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・皿Ｂ、ミニチュア高杯・鉢Ｃ・甕、須恵器杯蓋（23）・杯Ａ・Ｂ、皿・壺Ａ・壺Ｂ・壺Ｇ・壺Ａ蓋・壺Ｘ（24）・把手付壺（25）・平瓶・横瓶・鉢Ａ・鉢Ｅ・甕が出土している。23は頂部外面をロクロケズリで調整する。内面は非常に平滑で墨痕が残り、転用硯と思われる。25は外面に暗灰緑色の自然釉がかかる。底部内面にも釉の降下がみられ、蓋をしない状態で焼かれたことがわかる。

これらの土器は器形や調整から、ＳＥ506枠内とＳＤ107出土のものは8世紀末、ＳＥ507枠内出土のものは9世紀前半に位置づけられる。　（宮崎正裕・池田裕英）

Ⅴ．調査所見

条坊遺構　調査地の北端に想定できる四条大路に関する遺構は、今回の発掘区内では確認できなかった。

東四坊坊間東小路については、当発掘区の北約100

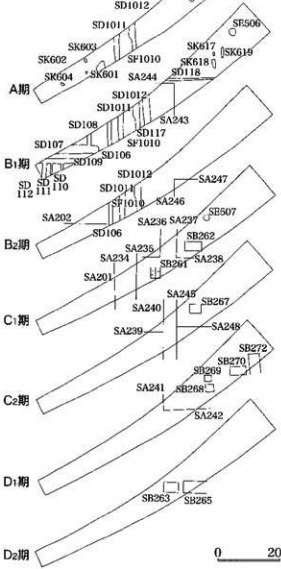


ＨＪ第541次調査　ＳＥ506・507、ＳＤ107出土土器（1/4）

mの左京四条四坊十二・十三坪間で実施したＨＪ第335次調査でも検出している。この調査で得られた東四坊坊間東小路心の国土座標値はＸ＝-147,031.0、Ｙ＝-16,589.0で、今回、検出した道路心と比較すると、国土座標北に対してN0°24'47"Wの振れをもつ。また、十六坪東端のＨＪ第486次調査で検出している東四坊大路（ＳＦ1601）の両側溝心心間の距離から導いた東四坊大路心と東四坊坊間東小路心の距離は、計算上約132.7mを測る。

坪内の様相と遺構変遷　今回検出した主要遺構の変遷をまとめると、遺構の重複関係や配置、遺物の年代観などから、以下のＡ～Ｄの４期に大きく分けられる。

Ａ期　東四坊坊間東小路ＳＦ1010の両側溝（ＳＤ1011・1012）が掘られる。九坪内には土坑ＳＫ601～604が、十六坪内には土坑ＳＫ612・620・623が点在する。奈良時代前半に相当するものと思われる。



ＨＪ第541次調査　遺構変遷概念図　(1/1200)

Ｂ₁期　九坪内には南北溝ＳＤ106や坪内を南北1/2で区画する東西溝ＳＤ107・109が掘られる。十六坪内には南北溝ＳＤ117や、坪内を北から1/4で区画する東西溝ＳＤ118が掘られる。ＳＤ118の南側には、ＳＡ243・244が建てられる。さらに、坪の北端には井戸ＳＥ506が掘られる。奈良時代後半に相当するものと思われる。

Ｂ₂期　九坪内はＳＤ107～112の区画溝が埋められ、東西溝ＳＤ107の北端を踏襲する位置に東西塀ＳＡ202が建てられる。十六坪内は西端の南北溝ＳＤ117が埋められ、さらに一帯が整地される。奈良時代末～平安時代初頭に相当するものと思われる。

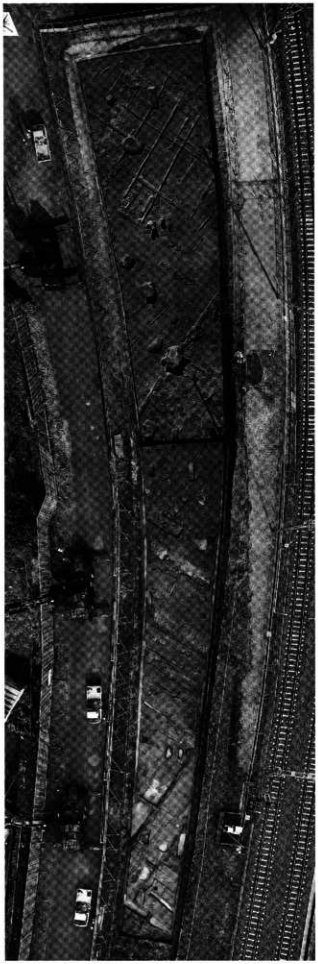
Ｃ₁期　東四坊坊間東小路の両側溝（ＳＤ1011・1012）が廃絶し、路面には南北塀ＳＡ234が建てられる。さらに、すぐ西側の九坪東端には南北塀ＳＡ201が建てられる。南北塀ＳＡ201とＳＡ234の間は、東四坊坊間東小路を踏襲した南北道路としての機能を保っていた可能性がある。十六坪内には東西棟建物ＳＢ262と井戸ＳＥ507を囲むように、南北塀ＳＡ237と東西塀ＳＡ238が、これらの西側の対称位置には南北塀ＳＡ236と東西塀ＳＡ235が、その南側にはＳＡ236と柱筋を揃えた南北棟建物ＳＢ261が建てられる。ＳＡ236とＳＡ237の間には南北方向の通路が想定できる。

Ｃ₂期　Ｃ₁期の南北塀ＳＡ236・237、東西塀ＳＡ235・238とＳＢ262をほぼ踏襲した位置に、南北塀ＳＡ240・245と東西塀ＳＡ239・248と東西棟建物ＳＢ267が建てられる。ＳＡ240とＳＡ245の間は、Ｃ₁期よりもさらに南に延びる南北通路となる。

Ｄ₁期　Ｃ₂期のＳＡ240の柱筋を踏襲した位置に、国土座標北で西に振れる南北塀ＳＡ241が建てられ、南端で東西塀ＳＡ242と繋がる。ＳＡ241・242で区画された北東側に、建物の主軸がＳＡ241・242と同じ方位に振れるＳＢ268・269・270・272が建てられる。

Ｄ₂期　十六坪西端は塀で囲まれなくなり、Ｄ₁期のＳＡ242を踏襲した位置に、東西棟建物ＳＢ263・265が南側柱筋を揃えて建てられる。

今回の調査成果をまとめると、奈良時代の様相は大きく２期に分けられる。九・十六坪内とも、奈良時代後半（Ｂ₁期）までは溝で区画され、奈良時代末（Ｂ₂期）になると、これらの溝を埋めて掘立柱塀で区画されている。また、東四坊坊間東小路の側溝が埋まる平城廃都後も十六坪内は掘立柱塀で区画され、掘立柱建物や井戸が所在することなどから、少なくとも平安時代前半までは利用され続けられたことが窺える。　（宮崎正裕）



HJ 第 541 次調査　空中写真（上が北東）

西発掘区全景（北東から）

西発掘区全景（南西から）

東発掘区全景（北から）

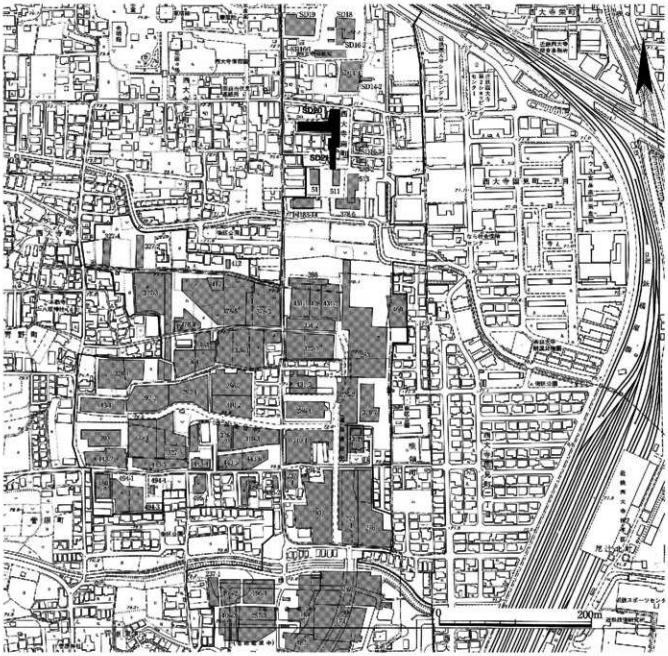
東発掘区全景（南西から）

2．近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る調査

本調査は、奈良市が進めている近鉄西大寺駅南土地区画整理事業（総面積約30万㎡）について実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では昭和63年から事業地内の発掘調査を継続して実施している。平成17年度は下表のとおり、2箇所で発掘調査を実施した。合計調査面積は1,520㎡であり、初年度からの総調査面積は108,099㎡になる。これらの調査は、平城京の条坊復原では西大寺旧境内及び一条南大路に該当してい

平成 17 年度近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
西大寺旧境内	S D20	臨時交付金事業	西大寺南町2405-1他	2005/6/15～9/14	1060㎡	安井
西大寺旧境内・一条南大路	S D21	通常事業	西大寺南町2387-2他	2005/12/15～2006/3/13	460㎡	安井



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内の調査発掘区位置図（1/5000）

（1） 西大寺旧境内の調査　第20次

Ⅰ．はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条三坊四坪の南西部にあたり、西大寺造営後は伽藍の東に隣接する寺地の一画となる。現況は宅地である。宅地化する前は水田で、坪の東側を画する西二坊大路と南側を画する一条南大路の想定地では遺存地溝が認められた。

四坪内では、過去に２件の調査が実施されている。坪の北東部で実施された市ＳＤ第14調査では、奈良時代から平安時代初頭にかけての掘立柱建物・塀、溝、井戸、土坑と、西二坊大路の位置を踏襲する江戸時代に埋没した旧河道が確認された。また、坪の南東隅で実施された市ＳＤ第16－３次調査では、西二坊大路と一条南大路の位置を踏襲する江戸時代に埋没した旧河道が確認された。

今回の調査は、西大寺造営前の四坪内及び造営後の寺地内の様相を確認することを目的として実施した。

Ⅱ．基本層序

基本的には、造成土（厚さ0.3m）の下に水田耕土・床土層（厚さ0.2m）があり、その直下で青灰白色シルト・粘土あるいはシルト混砂の地山となる。この層の上面が奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構面で、標高は70.8～71.0mである。ただし、発掘区南東部では地山上面が約１m低く、水田耕土・床土層との間に鎌倉時代（13世紀）の土器片を含む灰色砂質シルト層がみられる。

Ⅲ．検出遺構

遺構検出は地山上面で行った。主な検出遺構には、奈良～平安時代中期の掘立柱建物３棟（ＳＢ31～33）、掘立柱列８条（ＳＡ34～41）、井戸２基（ＳＥ42・43）、土坑２基（ＳＫ45・46）、平安時代末～鎌倉時代の井戸１基（ＳＥ44）・池状遺構１基（ＳＸ47）がある。各遺構の概要は、遺構一覧表に示す通りである。

奈良～平安時代中期の遺構　この時期の遺構は発掘区内に散在する。

ＳＢ31は南廂付き東西棟建物の南東隅部分とみられ、重複関係からＳＫ45・46より古い。掘立柱列のうち、ＳＡ34・35・37～41は塀である。ＳＡ34は重複関係からＳＫ45より新しい。ＳＡ35はＳＡ34に接続する。ＳＡ36は柱穴の形状や大きさから、後述する平安時代末～鎌倉時代のＳＸ47の掘削により西部分が破壊された南北棟建物の東側柱列の可能性がある。

ＳＥ42の井戸枠は２段分が残る。木溜の周囲に木炭や礫が敷かれている。枠内埋土から８世紀の土器・瓦類片が出土した。ＳＥ43の井戸枠は抜き取られている。重複関係から後述のＳＸ47より古い。ＳＥ44の井戸枠は最下段のみ残る。

なお、ＳＫ45・46の埋土からは９世紀末～10世紀初頭の土器片が出土した。

平安時代末～鎌倉時代の遺構　この時期の遺構は発掘区の西辺部でみられる。

ＳＥ44は後述のＳＸ47と同じ埋土で埋まる。埋土から12世紀前半の土器片が出土した。ＳＸ47は北寄りが深くなっており、西岸には導水路とみられる溝が接続する。廃絶後は多量の地山のシルト・粘土ブロックで埋め立てられる。埋土中から８～13世紀の土器片と８世紀の瓦片が出土した。

SD第20次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間） 桁行×梁行	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法（m） 桁行	梁行	備考
ＳＢ31	東西	1以上×1以上	1.8以上	2.4以上	1.8	2.7	南廂（廂の出2.1m）、柱穴深さ0.1～0.2m
ＳＢ32	東西	3×1	5.4	3.6	1.8等間	3.6	柱穴深さ0.2m
ＳＢ33	東西	3×2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間	柱穴深さ0.2～0.5m
ＳＡ34	南北	5以上	9.0		1.8等間		柱穴深さ0.1～0.2m
ＳＡ35	東西	3以上	6.3		2.1等間		柱穴深さ0.1～0.2m
ＳＡ36	南北	3以上	6.6		2.1－2.1－2.4		柱穴深さ0.3～0.4m、柱痕跡
ＳＡ37	南北	3	5.4		1.8等間		柱穴深さ0.1～0.2m
ＳＡ38	南北	2	3.3		1.65等間		柱穴深さ0.2～0.3m
ＳＡ39	東西	3	5.4		1.8－2.1－1.5		柱穴深さ0.1～0.2m
ＳＡ40	東西	2	3.3		1.65等間		柱穴深さ0.1～0.2m
ＳＡ41	東西	2	4.8		2.4等間		柱穴深さ0.1m

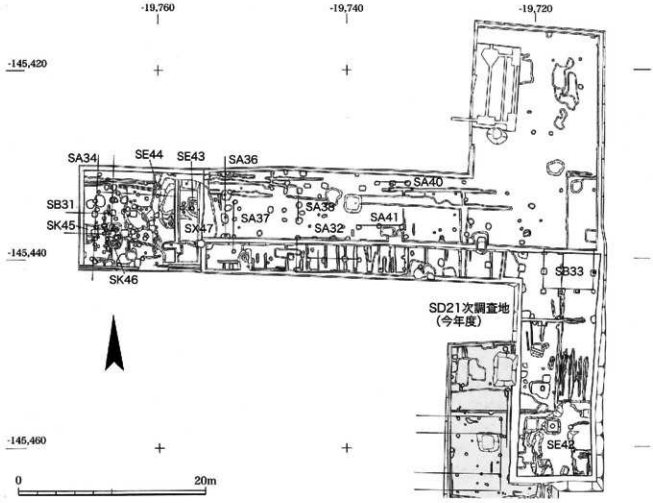
遺構番号	掘形			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法（m）		
ＳＥ42	隅丸方形	東西2.0×南北1.7	0.90	方形横板組	1.08×1.08	奈良時代の土器片・瓦片	底部に曲物を利用した水溜
ＳＥ43	隅丸方形	東西1.2以上×南北2.0	0.30	（抜き取られている）		なし	底部に曲物を利用した水溜
ＳＥ44	円	径0.8	0.70	曲物樋上	径0.45	平安時代末の土器片	
ＳＫ45	隅丸方形	東西1.5以上×南北2.1	0.15			平安時代中期の土器片	
ＳＫ46	隅丸方形	東西1.5×南北2.8	0.20			平安時代中期の土器片	
ＳＰ47	楕円方形	東西6.0×南北3.5	0.40			平安・鎌倉時代の土器片	

発掘区全景（東から）

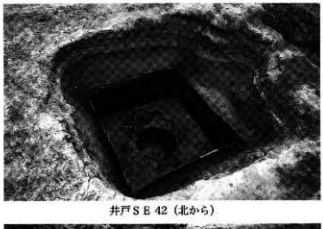
発掘区南東部（北から）

発掘区西端部（南西から）

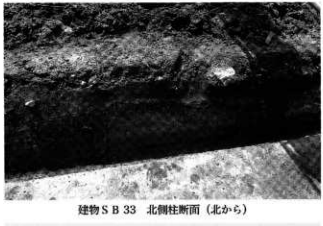
発掘区中央部（南西から）



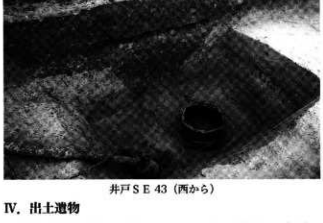
SD 第 20 次調査　発掘区遺構平面図　(1/400)



井戸ＳＥ42（北から）



建物ＳＢ33　北側柱断面（北から）



井戸ＳＥ43（西から）

井戸ＳＥ42出土隅木蓋瓦

Ⅳ．出土遺物

土器が遺物整理箱18箱分、瓦類が同２箱分、木製品が10点出土した。

奈良～平安時代中期　土器には、柱穴や井戸ＳＥ42の埋土から出土した8世紀の土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・高杯・甕・壷、鎌倉時代の池状遺構ＳＸ47の埋土から出土した9世紀末～10世紀初頭の灰釉陶器椀、緑釉陶器皿、土坑ＳＫ45・46の埋土から出土した10世紀後半～11世紀初頭の土師器皿がある。

瓦類は、主にＳＥ42やＳＸ47の埋土から出土した。

ＳＥ42から出土した瓦類には、丸・平瓦と軒丸瓦6236型式Ａ種4点と隅木蓋瓦、塼がある。隅木蓋瓦（写真）は平蓋形で前面を花弁状につくり、周縁の3cm内側に幅１cm、深さ0.7cmの溝が巡る。幅50cm、残存長約28cm。厚さは周縁部で4cm、中央部で6cmと上面が盛り上がり、緩やかな甲盛りとなっている。上面の中軸線上には刻線があり、前端から21cmの位置に一辺1.8cmの方形の釘孔がある。下面は平坦である。接合しない隅部分の破片があり、２個体ある。

他に、発掘区南東部の灰色砂質シルト層からは方形の施釉瓦片が出土した。厚さ0.9cm。濃緑釉で三葉文の輪郭を、淡緑釉で周縁の線を描く。西大寺塔の三彩棰先瓦類似した構図をもち、塔所用棰先瓦である可能性がある。また、奈良時代の柱穴から軒平瓦6646型式Ｄ種１点が出土している。

平安時代末～鎌倉時代　井戸ＳＥ44の埋土から出土した12世紀前半の土師器皿、瓦器椀、ＳＸ47の埋土から出土した13世紀前半の土師器皿・羽釜や瓦器椀・小椀がある。

Ⅴ．まとめ

今回の発掘調査の成果は以下の通りである。

① 奈良～平安時代の井戸SE42から出土した西大寺創建時の軒丸瓦6236Ａや隅木蓋瓦は9世紀中頃から10世紀にかけての罹災によって廃絶した西大寺伽藍の建物に伴うものとみられ、平安時代における西大寺の急速な衰退がうかがえる。

② 奈良時代から平安時代中期にかけての遺構は宅地の様相を示し、重複関係から少なくとも３時期の変遷がある。北隣接地の市ＳＤ14次調査地でも同様であることから、調査地付近ではこの時期に広く宅地として利用されたと考えられる。

③ 平安時代末から鎌倉時代については、発掘区の西辺部で井戸ＳＥ44や池状遺構ＳＸ47を確認したことや、これらの埋土から椀・皿といった日用の土器が出土したことから、西大寺の伽藍に近い調査地の西寄りが居住地であったことがうかがえる。ＳＸ47の性格については、庭の池や耕地用の貯水池の可能性があるが、本調査の成果だけでは確定しづらい。　（安井宣也）

1）奈良国立文化財研究所「昭和53年度　平城宮跡発掘調査部　発掘調査概報」1979

（2） 西大寺旧境内・平城京跡（一条南大路）の調査　第21次

Ⅰ．はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では西大寺造営後に寺地の一画となる右京一条二坊四坪の南辺中央部及び一条南大路にあたる。現況は宅地である。宅地化する前は水田で、四坪の東側を西する西二坊大路と南側を画する一条南大路の遺存地割が認められた。

調査地周辺では、過去に５件の調査が実施されている。北隣接地で今年度に実施された市ＳＤ第20次調査では、奈良～平安時代中期の宅地に関連する遺構や平安時代末～鎌倉時代の井戸、池状遺構が確認された。西二坊大路の遺存地割にあたる箇所で実施された市ＳＤ第16-3次調査では、江戸時代までに埋没した旧流路が確認された。また、一条南大路の遺存地割にあたる箇所で実施された市ＨＪ第480-2次調査では江戸時代までに埋没した旧流路が、市ＨＪ第513次調査では遺存地割の南端部にあたる箇所の地山が北落ちの急斜面に改変されていることが、それぞれ確認されている。

今回の調査は、四坪の南辺中央部及び一条南大路の様相の把握を目的として実施した。

Ⅱ．基本層序

発掘区北半部では、北寄りにおいては造成土（厚さ0.2m）、オリーブ黒色砂質シルトの水田耕土（厚さ0.1m）、灰色シルト質砂の水田床土（厚さ0.1m）の下で青灰白色のシルト・粘土やシルト混砂の地山となり、南寄りにおいては地山上面が切土により約0.5m低くなり、水田床土層との間に奈良時代や鎌倉時代の遺物を含む灰色砂質シルト層がみられる。奈良時代の遺構が存する面は地山上面で、標高は概ね70.8mである。

発掘区南半部では、基本的に造成土（厚さ0.6～1.7m）、水田耕土（厚さ0.2m）の下に江戸時代の水田造成に伴い形成された層（厚さ1～1.2m）があり、その下で後述する室町時代以前の切通し状遺構ＳＤ49の埋土となる。江戸時代の水田造成に伴う層は、南寄りが地山のシルト・粘土のブロックからなる盛土、北寄りが暗灰色シルト・粘土の水田耕土（厚さ0.1～0.2m）と地山のシルト・粘土のブロックからなる水田床土（厚さ0.1～0.2m）の互層で、いずれも土器片を含む。

Ⅲ．検出遺構

四坪内にあたる発掘区北半部で奈良～平安時代前半とみられる掘立柱建物ＳＢ48を、一条南大路にあたる同南半部で室町時代以前の旧流路ＳＤ49を検出した。

ＳＢ48　桁行2間（4.5m）以上、梁間２間（7.8m）の東西棟南北廂付建物で、発掘区外西に続く。柱間寸法は、桁行2.25m等間、梁間2.1m等間、廂の出1.8m。

ＳＤ49　幅13～14mの東西方向の旧流路。両岸沿いは江戸時代の水田造成で改変されており、周辺の遺構面から1mほど低くなっている。

埋土は、南寄りが寄州を形成する砂礫層、北寄りが寄州と北岸の間にできた凹地内に堆積した暗灰色や褐色の腐植混シルト・粘土層やシルト質砂層となる。後者から８世紀の土器・瓦片、平安時代以降の瓦片や14～16世紀の土器片・木製品が出土した。

なお、埋土を最深部で約２m掘下げたが、底面は確認できなかった。

Ⅳ．出土遺物

土器類が遺物整理箱９箱分、瓦類が同６箱分、木製品が７点出土した。

土器類には、奈良及び鎌倉・室町・江戸の各時代のものがある。残存状態は概してよくない。奈良時代の土器には、発掘区北半部の遺物包含層である灰色砂質シルト層や旧流路ＳＤ49の埋土から出土した土師器甕・高杯や須恵器甕・壺・杯等がある。鎌倉・室町時代の土器には、発掘区北半部の遺物包含層である灰色砂質シルト層から出土した13世紀の土師器皿や瓦器椀、ＳＤ49の埋土から出土した14～16世紀の土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、青磁椀等がある。江戸時代の土器にはＳＤ49の埋土から出土した伊万里焼椀等の陶磁器がある。

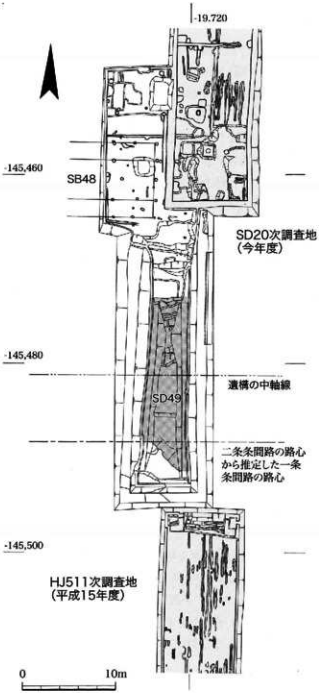
瓦類には、ＳＤ49の埋土から出土した奈良時代の軒丸瓦6685Ａ・丸瓦・平瓦、平安時代以降の巴紋軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。

木製品には、ＳＤ49の埋土から出土した下駄や漆器椀等がある。

Ⅴ．調査所見

四坪の南辺部は、奈良～平安時代前半とみられる掘立柱建物ＳＢ48を確認したことから、宅地の一画となっていたことがうかがえる。

一条南大路の想定地で確認された室町時代以前の旧流路ＳＤ49は、一条南大路の切通し内に水が流れたものなのか、後に掘り直したものなのか、現状では特定できない。ただし、この遺構の中軸線の位置は、南約260mの市ＨＪ第283次調査で確認された二条条間路の路心をもとに推定した一条南大路の路心よりも約７m北である。右京一条では、発掘調査で把握できた一条条間路及び一条条間北小路の路心の位置が推定される条坊計画心より少し北にずれることがわかっている。このことを踏まえると、この旧流路は一条南大路の位置を踏襲していると



SD第21次調査　発掘区遺構平面図（1/400）

発掘区全景（北から）

発掘区全景（南から）

発掘区南半部西壁（南東から）

ＳＤ49　室町時代遺物出土状態（南西から）

考えられ、一条南大路が条坊計画心より約７ｍ北に路心をずらして施工されていた可能性がある。

なお、ＳＤ49については、

① 調査地の近くを秋篠川の支流である外大門川が北西から南東に流れており、この遺構の西延長上が川筋にあたる。

② 調査地南方の外大門川沿いで行われた調整池の掘削工事の際に、現地表から約7ｍ下で室町時代の14～16世紀の土器や木製品を含む旧河川に伴う砂礫層が確認されている。

の上記２点を勘案すれば、室町時代の外大門川の分水路であった可能性が高い。　（安井宣也）

3. 平城京跡（東四坊大路）・油坂遺跡の調査　第529次

事業名	大和都市計画街路事業（芝辻大森線）	調査期間	平成17年5月9日～6月14日
届出者名	奈良市長	調査面積	212㎡
調査地	奈良市大宮町二丁目124-5、136-4、82-67	調査担当者	秋山成人・久保清子・山前智敬

Ⅰ　はじめに

本調査は、平城京東四坊大路跡に沿って計画される都市計画街路の事前調査である。過去の調査では、東四坊大路及び同西側溝、三条条間南小路南側溝を確認している、その他に弥生時代末から古墳時代初頭の井戸・土坑・溝、縄文時代晩期の土坑等も確認している。[1] 今回の調査では、現在の三条通りの北側に北に向かって第１・第２発掘区、さらに北へ150mのところにＨＪ第502次調査地の北側で第3発掘区を設定し、東四坊大路および同側溝、三条大路北側溝の確認と、縄文・弥生・古墳時代の遺跡の様相を明らかにすることを目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

第１発掘区・第２発掘区の層序は、上から造成土、黒灰色土（旧耕土）、茶灰色砂質土、茶灰色粘砂、黄灰色粘質土と続き、黄褐色粘土（地山）の順となる。検出遺構面は、２面ある。この発掘区では、鎌倉・室町時代の遺構面が黄灰色粘質土上面（標高64.1m）で、奈良時代の遺構面が黄褐色粘土上面（標高64.0m）となる。

第３発掘区の層序は、上から造成土、黒灰色土（旧耕土）、黄褐色粘質土、褐色粘土と続き、黄褐色砂質土（地山）の順となる。検出遺構面は、２面ある。この発掘区では、奈良時代の遺構面が褐色粘土上面（標高64.6m）で、黄褐色砂質土上面（標高64.4m）が弥生時代以前の遺構面となる。

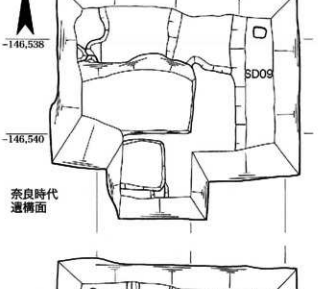
Ⅲ　検出遺構

弥生時代以前の土坑６基（ＳＫ01～06）、弥生時代末から古墳時代初めの溝１条（ＳＤ07）を第３発掘区で検出。奈良時代の東四坊大路東側溝（ＳＤ09）西肩部分を第１・２発掘区で検出。西側溝（ＳＤ10）を第３発掘区で検出。鎌倉・室町時代の掘立柱列１条（ＳＡ11）を第１発掘区で検出。各遺構の概要は、検出遺構一覧表にまとめた。

Ⅳ　出土遺物

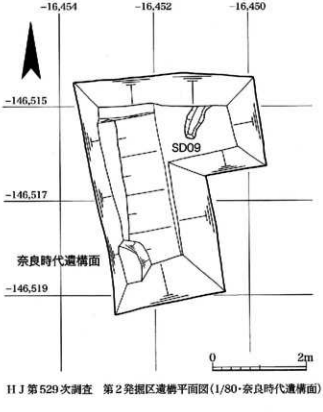
遺物整理箱６箱分が出土した。弥生土器甕、庄内式土器壺・小型器台[2]、サヌカイト製石鏃、石核、剥片が第３発掘区から出土。奈良時代の土師器皿・須恵器杯、丸瓦、平瓦、刻印平瓦、埼が第１～３発掘区から出土。平安時代の白磁椀、鎌倉時代の瓦器椀、室町時代の青磁椀、土師器羽釜、時期不明の砥石、鉄滓が第１・２発掘区から出土。

ＨＪ第 529 調査　発掘区位置図（1/5000）

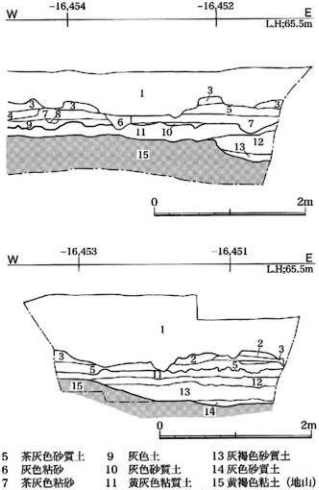


ＨＪ第 529 次調査　第１発掘区遺構平面図（1/80）

（上）奈良時代遺構面・（下）鎌倉・室町時代遺構面



H J 第529次調査　第2発掘区遺構平面図(1/80・奈良時代遺構面)



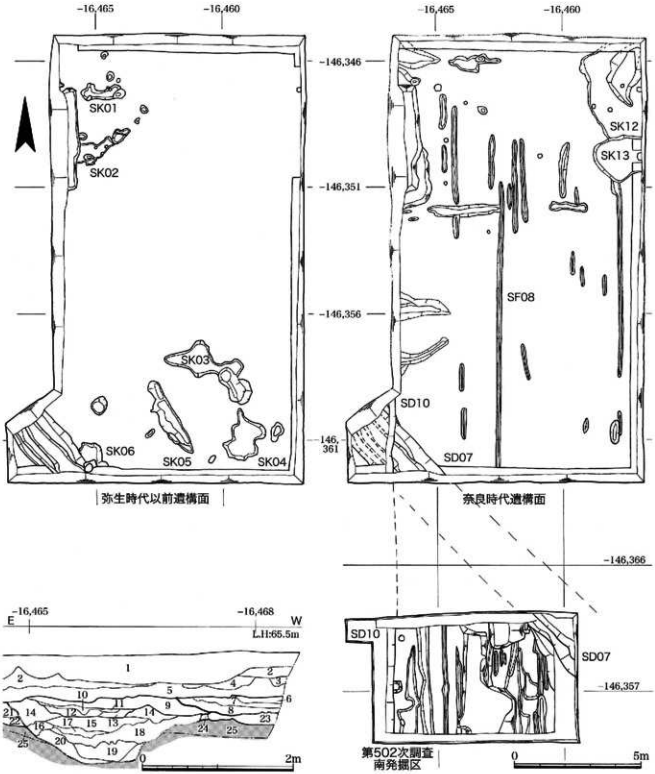
1　造成土
2　黄茶色土（耕土）
3　黒灰色土（耕土）
4　淡灰色土
5　茶灰色砂質土
6　灰色粘砂
7　茶灰色粘砂
8　灰色粘土
9　灰色土
10　灰色砂質土
11　黄灰色粘質土
12　褐灰色粘質土（12～14 S D 09 埋土）
13 灰褐色砂質土
14 灰色砂質土
15 黄褐色粘土（地山）

H J 第529次調査　第1発掘区北壁土層断面図(上)・第2発掘区北壁土層断面図(下)(1/50)

H J 第529次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	発掘区番号	検方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法m		備考
			桁行(間)×梁行(間)	m	m	桁行	梁行	
S A 11	第3発掘区	南北	1以上	1.65以上		1.65		柱穴から13世紀末から14世紀の土師器羽釜が出土

遺構番号	発掘区番号	掘形			主な出土遺物	備考
		平面形	平面規模（m）	深さ(m)		
SK01	第3発掘区	不整形	南北0.4×東西1.6	0.6	なし	埋土は暗黄褐色粘砂
SK02	第3発掘区	不整形	南北0.5×東西1.1	0.3	なし	埋土は暗黄褐色粘砂
SK03	第3発掘区	不整形	南北1.4～0.4×東西2.9	0.8	なし	埋土は暗黄褐色粘砂
SK04	第3発掘区	不整形	南北1.6×東西1.4～0.9	0.9	なし	埋土は暗黄褐色粘砂
SK05	第3発掘区	不整形	南北2.1×東西0.7	0.2	なし	埋土は暗黄褐色粘砂
SK06	第3発掘区	不整形	南北0.9×東西0.9	0.1	なし	埋土は暗黄褐色粘砂
SD07	第3発掘区	斜行溝	長さ3.6以上×幅2.7	0.9	弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器	重複関係から溝SD10より古い
SF08	第3発掘区		長さ17以上×幅9.5以上		路面上に南北方向の細い溝が数条みられその埋土から須恵器小片出土	路面舗装は認められず
SD09	第1発掘区	南北溝	南北2.9以上×幅0.9以上	0.6	奈良時代の土師器小片・須恵器小片出土	溝西肩の旧国土座標はX=−146,537.48 Y=−16,452.10
SD09	第2発掘区	南北溝	南北3.3以上×幅2.5以上	0.4	奈良時代の土師器小片・須恵器小片出土	溝西肩の旧国土座標はX=-146,515.00 Y=−16,452.85
SD10	第3発掘区	南北溝	南北3以上　幅1.7	0.3	奈良時代の土師器・須恵器出土	溝東肩の旧国土座標はX=-146,362.50 Y=−16,466.93
SK12	第3発掘区	不整形	南北3.5以上×東西2.2以上	0.4	なし	埋土は上層暗褐色土　下層淡褐色砂質土
SK13	第3発掘区	不整形	南北1.8×東西1.9以上	0.2	縄土塊　炭	埋土は暗褐色土



1 遺成土
2 黒灰色土（耕土）
3 黄灰褐色砂質土
4 暗灰色粘砂
5 黄褐色粘質土
6 褐灰色粘質土
7 灰褐色粘質土
8 茶灰色粘質土
9 黄灰褐色砂質土
10 灰色粗砂
11 黄灰色粘砂
12 灰色粘土
（6～8　ＳＤ10埋土　9～20　ＳＤ07埋土）
13 灰色粘砂
14 黄灰色砂
15 灰褐色粘砂
16 淡灰色粘砂
17 暗灰色粘砂
18 黒灰色粘土
19 青灰色粘砂
20 淡灰色細砂
21 暗灰褐色粘土と茶灰色砂の混合土
22 暗灰褐色粘土
23 暗褐灰色粘土
24 褐色粘土
25 黄褐色砂質土

ＨＪ第529次調査　第3発掘区　遺構平面図（1/150・上左は弥生時代以前の遺構面・上右は奈良時代遺構面）南壁土層断面図（1/50・下左）

また、凹面に刻印された『六人』銘の平瓦が、第２発掘区遺物包含層（黄灰色粘質土）から１点出土した。この刻印は、恭仁宮跡出土のＫＪ05B型式[3]と同笵とみられる。

Ⅴ　調査所見

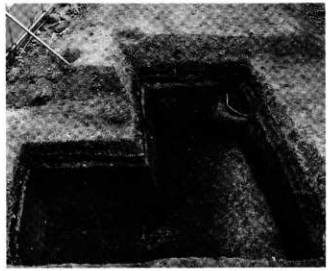
今回の調査では、東四坊大路東側溝（ＳＤ09）、西側溝（ＳＤ10）を確認したが、三条大路については、北側溝を第１発掘区内に想定していたが、確認できなかった。また、第３発掘区では、弥生時代末から古墳時代初めの溝（ＳＤ07）を検出しており、ＨＪ第502次調査発掘区北東隅で検出した溝[4]に続くと考えられる。近接するＨＪ第515次調査でも同時期の井戸・土坑・溝[5]を検出しており、弥生時代末から古墳時代初めの遺跡の広がりがうかがえる。　　（秋山成人・久保清子・山前智敬）

1）奈良市教育委員会「油阪遺跡・平城京跡（左京三条四坊十二坪・東四坊大路）の調査第461・465・479次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成13年度』2004
2）財団法人大阪府文化財センター『古式土師器の年代学』2006
3）京都府教育委員会「第六章出土遺物2瓦」『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』2000
4）奈良市教育委員会「油阪遺跡・平城京跡（東四坊大路）の調査第502次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』2006
5）奈良市教育委員会「平城京跡（東四坊大路）の調査第515次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成16年度』2007

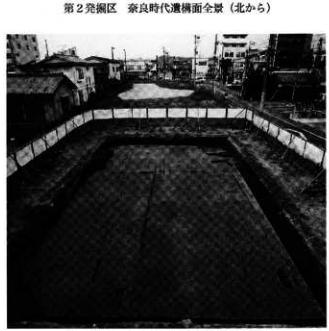
第３発掘区　溝 SD07（南東から）

第３発掘区　溝 SD10（南から）

第１発掘区　奈良時代遺構面全景（北東から）



第２発掘区　奈良時代遺構面全景（北から）



第３発掘区　奈良時代遺構面全景（南から）

4．平城京跡（左京四条三坊六坪）の調査　第530次

事業名	宅地造成	調査期間	平成17年5月9日～5月17日
届出者名	（株）オークホーム　（株）栗東住宅	調査面積	105㎡
調査地	奈良市三条桧町161-1他	調査担当者	池田裕英・松浦五輪美・武田和哉

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条三坊六坪のほぼ中央部にあたる。この六坪では平成８年度に市ＨＪ第355次調査を行っており、坪内を1/3に区画する塀を検出し、奈良時代中頃から後半にかけて坪が分割して使用されていたことがわかっている[1]。

本調査は、六坪内の様相を明らかにすることを目的に、敷地の南半部に東西２箇所の発掘区を設定して行った。

Ⅱ　基本層序

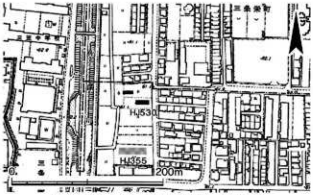
東発掘区　層序は上から造成土、黒灰色土（旧耕土）、灰褐色砂質土、灰褐色土、灰褐色粘質土と続き、現地表下約1.5mで茶黄色土の地山にいたる。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は60.5mである。

西発掘区　層序は上から造成土、暗褐色土（旧耕土）、灰褐色土、茶褐色土、茶灰褐色土、茶灰色砂質土、茶灰褐色粘質土、茶灰色粘質土、暗灰色粘土、暗茶褐色土と続き、現地表下約1.4mで灰緑色粘土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。地山上面の標高は59.8mである。

Ⅲ　検出遺構

東発掘区　検出遺構には土坑（ＳＫ01）、井戸（ＳＥ01）がある。ＳＫ01は東西4.9m、南北1.5m、深さ0.3mである。ＳＥ01は発掘区東南隅で検出し、東西0.8m以上、南北1.5m以上、深さ0.5m以上である。枠材の隅柱を検出したが、発掘区を拡張できず、規模や構造は不明である。両遺構とも奈良時代の遺物が出土したが、詳細な時期は不明である。

西発掘区　土坑（ＳＫ02）と小穴（Ｐ1）を検出した。ＳＫ02は東西1.3m、南北1.5m以上、深さ0.5mである。



ＨＪ第530次調査　発掘区位置図（1/5000）

奈良時代中頃から後半と考えられる土器が出土した。Ｐ1は径0.15～0.2mの平面円形で、深さ0.1mである。

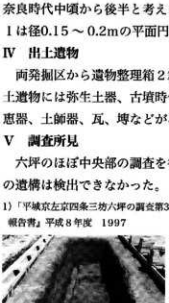
Ⅳ　出土遺物

両発掘区から遺物整理箱２箱分の遺物が出土した。出土遺物には弥生土器、古墳時代の土師器、奈良時代の須恵器、土師器、瓦、埴などがある。

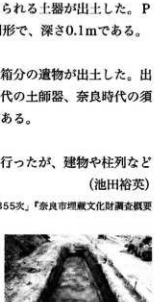
Ⅴ　調査所見

六坪のほぼ中央部の調査を行ったが、建物や柱列などの遺構は検出できなかった。　（池田裕英）

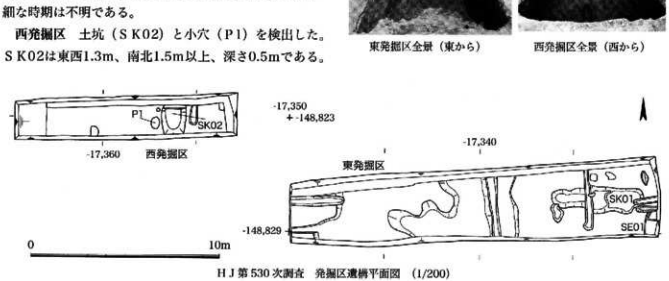
1）「平城京左京四条三坊六坪の調査第355次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成８年度　1997



東発掘区全景（東から）



西発掘区全景（西から）



ＨＪ第530次調査　発掘区遺構平面図（1/200）

5．平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡の調査　第531次

事業名	共同住宅建設	調査期間	平成17年5月16日～7月21日
届出者名	個人	調査面積	372㎡
調査地	奈良市今小路町7-1、8-1番地	調査担当者	中島和彦・武田和哉

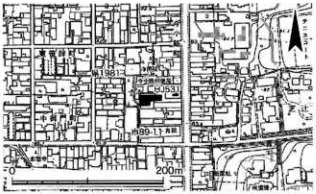
Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京二条七坊十五坪の中央部の東寄りにあたり、東七坊大路の西隣にある。今小路の名は平安時代後半から「今小路郷」として史料に現れる。調査地の南約50mの調査（市89-11次調査）では10世紀頃の井戸が、西約80mの調査（県1981年調査）では11世紀の土坑と14世紀の井戸が検出されている。今回の調査地も各時代の遺構が重層的に遺存すると考えられ、次の2点に注意して発掘調査を行った。1点目は平城京の東七坊大路に関する遺構の有無の確認、2点目は中世以降の宅地内の利用状況の解明である。

調査地は東側の道路に間口を開ける東西に長い敷地で、西側の敷地奥に第1発掘区を、東北隅の道路近くに第2発掘区を設定し、第1発掘区は作業実施の都合上で東西2回に分けて調査した。

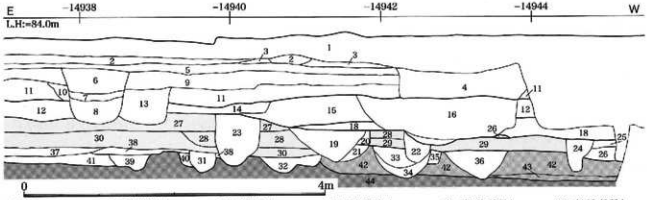
Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、多くの層が重複し複雑であるが、第1発掘区では大きく近代以降の造成土、江戸時代後半の整地層（Ⅰ層、土層図12・14・15）、江戸時代中頃の整地層（Ⅱ層、土層図18）、室町時代の整地層（Ⅲ層、土層図27～30）に大別される。さらに西端と北東部には奈良時代以前の遺物を含む整地土（または堆積土、Ⅳ



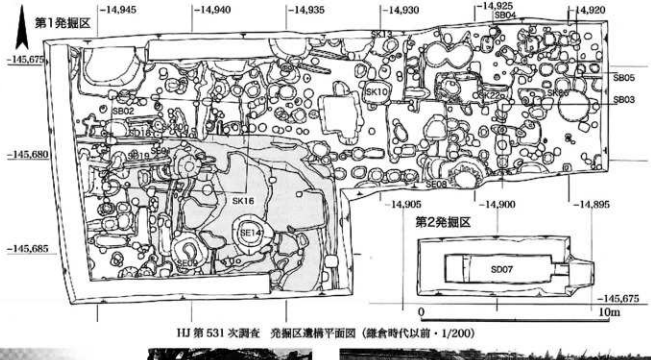
HJ第531次調査　発掘区位置図（1/5000）

第2発掘区全景（西から）



1　造成土
2　マサ土（明褐色砂）
3　暗灰褐色土
4　暗灰褐色土（炭含む）
5　灰褐色土
6　暗灰褐色土（炭含む）
7　黄褐色粘土
8　暗灰褐色土（瓦礫多く含む）
9　暗茶灰色土
10　暗茶褐色土
11　茶褐色土（漆喰・瓦片多く含む）
12　灰褐色土（瓦片多く含むⅠ層）
13　暗灰褐色土
14　暗灰褐色土（炭・瓦礫多く含むⅠ層）
15　茶褐色土（Ⅰ層）
16　瓦礫層
17　茶褐色土
18　淡茶褐色土（Ⅱ層）
19　暗灰色粘土（SD31）
20　淡茶褐色粘土（SD31）
21　茶褐色土（SD31）
22　灰褐色土
23　暗灰褐色粘質土（地山の黄褐色粘土ブロック多く含む）
24　暗灰褐色土
25　暗茶褐色土
26　暗茶褐色粘質土
27　淡灰色粘質土（Ⅲ層）
28　暗橙色粘土（灰褐色土含むⅢ層）
29　茶褐色土（Ⅲ層）
30　明茶褐色土（Ⅲ層）
31　暗灰色粘質土
32　暗灰色粘質土
33　暗茶褐色土
34　暗灰褐色土
35　淡茶褐色土
36　暗茶褐色土
37　茶褐色土（橙色土多く含む）
38　淡灰褐色土（地山の黄褐色粘土ブロック多く含む）
39　暗灰色粘質土
40　暗灰色粘質土（地山の黄褐色粘土ブロック多く含む）
41　暗灰色粘質土（地山の黄褐色粘土ブロック多く含むSK16）
42　暗橙色粘質土（Ⅳ層）
43　暗色砂質土（Ⅳ層）
44　黄灰色粘土（地山）

HJ第531次調査　第1発掘区南壁土層図（1/50）



HJ 第531次調査　発掘区遺構平面図（鎌倉時代以前・1/200）

第1発掘区西半部全景（鎌倉時代以前　北西から）

第1発掘区東半部全景（北東から）

層、土層図42・43）が部分的にあり、地表面から0.9～2.2mで黄灰色粘土か茶灰色砂礫の地山となる。Ⅳ層からは古墳時代後期後半頃の土器が少量出土した。地山は南東から北西に向かって低くなり、地山面の標高は南東隅が最も高く約82.9m、北西隅が最も低く約81.5mである。第2発掘区では、大きく近代以降の造成土、江戸時代の整地層（Ⅴ層）、鎌倉・室町時代の整地層（Ⅵ層）、奈良・平安時代の遺物包含層（Ⅶ層）に分かれる。地表面から1.4～1.6mで淡青灰色シルトか淡青灰色砂礫の地山となり、地山面の標高は約82.3～82.5mである。

遺構検出は、第1発掘区では地山上面で行ったが、一部Ⅳ層がある部分ではこの上面で行い、奈良時代以降の遺構を検出した。Ⅳ層下の地山上面では数個の柱穴を検出したが、多くはⅣ層上面から掘り込まれたものである。第2発掘区では地山上面とⅦ層上面で行い、前者で奈良時代、後者で平安時代後期以降の遺構を検出した。

Ⅲ　検出遺構

奈良～江戸時代までの各時代の遺構が大小約410基ある。詳細は一覧表に記し、各時代ごとに概観する。

奈良時代の遺構　掘立柱建物4棟（SB02～05）、井

HJ 第531次調査検出遺構一覧表

掘立柱建物遺構番号	桁方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m	梁間全長 m	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	備考
SB02	東西	3×2	5.3	4.8	2.25-2.9-2.1	2.4等間	
SB03	東西	3以上×2以上	4.8以上	2.1以上	2.4-2.4-?	2.1-?	
SB04	南北か？	1以上×2		4.1		2.1-1.8	
SB05	？	2以上×1以上	1.95以上		1.95		

井戸・土坑他遺構番号	掘形 平面形	掘形 平面規模(m)	掘形 深さ(m)	枠 平面形・構造	枠 内法(m)	枠 水溜・濾過装置等	年代	主要出土遺物	備考
SE01	隅丸方形	東西1.4×南北1.8	1.45	抜き取り		折敷・曲物	8世紀中頃～後半	土師器杯・甕、須恵器杯・壺・瓶、丸瓦、平瓦、曲物、	
SX06	隅丸長方形	東西4.5×南北0.5	0.3				8世紀中頃～後半？	須恵器壺Q	須恵器壺Qを石で蓋をして埋納
SD07	南北溝？	幅5.6×長さ1.5以上	0.3				8世紀後半～10世紀中頃	土師器杯・皿、須恵器杯・蓋・皿・壺・甕、丸瓦、平瓦、緑釉杯、軒丸瓦（6235Ma）	
SE08	隅丸方形？	東西0.8以上×南北1.2以上	0.8以上	抜き取り？			10世紀前半	土師器皿、黒色土器椀、平瓦、	現代の石組井戸で東半が破壊
SE09	楕円形	東西1.9×南北2.0	1.6	抜き取り？			11世紀末	土師器皿、黒色土器椀、瓦器椀、灰釉陶器椀、丸瓦、平瓦、曲物、六銭	
SK10	方形	東西1.4×南北1.3	0.3				11世紀末	土師器皿、瓦器椀、平瓦、	土器を完形で廃棄
SK11	楕円形	東西1.9×南北1.5	0.3				11世紀末	土師器皿・羽釜、瓦器椀、白磁椀、丸瓦、平瓦、	土器を完形で廃棄
SK12	隅丸方形	東西3.5×南北2.5以上	0.3				13世紀初め	土師器皿・羽釜、瓦器椀（和泉型含む）・皿、瓦質土器浅鉢、須恵器鉢、青磁椀、白磁椀、青白磁合子・皿、円盤型土製品1、軒丸瓦（6282E）、丸瓦、平瓦、鉄滓	土器を完形で廃棄
SK13	楕円形	東西1.4以上×南北1.1以上	0.1				13世紀前半	土師器皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜（山城型？）、東播系陶器鉢、青磁皿、丸瓦、平瓦	土器を完形で廃棄
SE14	不整円形	東西2.2×南北2.2	2.0	抜き取り？			13世紀中頃	土師器皿、瓦器椀・皿、東海系陶器甕・椀、白磁椀・皿、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、砥石1、鉄滓、木屑、曲物、[illegible]	
SK15	方形？	東西1.9×南北1.4以上	0.45				13世紀後半	土師器皿・脚台付皿・ミニチュア羽釜、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、東播系陶器捏鉢・鉢、青磁椀、白磁椀、青白磁合子、丸瓦、平瓦、砥石1、	土器を完形で廃棄
SK16	不整方形	東西11.2×南北8.0以上	0.5～0.7				13世紀末	土師器皿・脚台付皿・羽釜・ミニチュア羽釜・鉢、瓦器椀（和泉型含む）、輪花椀（楠葉型）・皿、瓦質土器浅鉢、須恵器鉢・壺、東播系陶器鉢・壺、白磁椀・杯・壺、青磁椀・壺・合子、青白磁壺、褐釉壺、陶枕、軒丸瓦（奈良時代型式不明）、丸瓦、平瓦、磚、石鍋2、砥石2、石鍋1、銅銭（治平元宝1）、鞴羽口、鉄滓、桃核	土師器皿を完形で多量に廃棄
SD17	南北溝	幅0.5×長さ3.4以上	0.1				13世紀末	土師器皿、丸瓦、平瓦	SK16に接続
SD18	東西溝	幅0.4×長さ4.8以上	0.1				13世紀末	土師器皿	SK16に接続
SD19	東西溝	幅0.4×長さ4.8以上	0.1				13世紀末	土師器皿、瓦器椀、東海系陶器甕、丸瓦、平瓦	SK16に接続
SK20	円形	径0.7	0.3				13世紀末	土師器皿、東海系陶器甕	土師器皿を完形で廃棄
SK21	不整長方形	東西2.5以上×南北1.5	0.7				13世紀末	土師器皿、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、東海系陶器甕、青磁椀、白磁椀、軒丸瓦（6012B）、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、鉄滓	土器を完形で廃棄
SK22	隅丸長方形	東西1.6以上×南北1.1	0.1				14世紀初め	土師器皿、瓦器皿、平瓦、	土器を完形で廃棄
SK23	長方形	東西5.5×南北0.9	0.25				14世紀以降？	瓦質土器鉢、丸瓦、平瓦、	底に自然石を南北に並置
SK24	長方形	東西0.7×南北0.9	0.3				14世紀以降？	丸瓦、平瓦、	底に自然石を南北に並置
SX25	長方形？	東西4.0以上×南北3.3以上	0.45	埋甕遺構 東西4列、南北2列以上			15世紀後半～16世紀前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、青磁椀、国産陶器（常滑甕、備前甕）、軒丸瓦（6235Mb）、丸瓦、平瓦、碁石1、銅銭（判読不能2）、	甕5基残存
SX26		東西5.4×南北2.0	0.1	埋甕遺構 東西7列、南北2列			15世紀後半～16世紀前半	土師器皿、国産陶器（備前甕・信楽擂鉢）、丸瓦、平瓦、	甕1基残存、抜き取り坑の1つから信楽擂鉢ほぼ完形で出土
SX27	長方形	東西2.4×南北1.7	0.1	方形石組	東西1.9×南北0.9		15世紀後半～16世紀前半	土師器皿、瓦質土器擂鉢・鉢、国産陶器（常滑甕、備前甕）、白磁椀・皿、青磁椀、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鞴羽口	
SX28		東西6.5×南北1.6	0.1	埋甕遺構 東西8列、南北2列			15世紀後半～16世紀前半？	土師器皿、丸瓦、平瓦、	抜き取り坑のみ
SK29	不整方形？	東西4.2以上×南北0.9以上	0.7				16世紀後半～17世紀初め	土師器皿、国産陶器（肥前陶碗・備前擂鉢）、丸瓦、平瓦、	
SE30	円形？	東西2.7以上×南北0.9以上	0.6以上	円形石組	0.9以上		17世紀前半～中頃	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・風炉、国産陶器（信楽擂鉢、瀬戸・美濃天目）、国産磁器（肥前染付）、丸瓦、平瓦、塼、	
SD31	南北溝	幅0.6～0.8×長さ12.0以上	0.4				17世紀後半	土師器皿・羽釜・焙烙、瓦質土器鉢、国産陶器（信楽擂鉢・壺、備前擂鉢、肥前陶椀）、国産磁器（肥前染付・皿）、丸瓦、平瓦、刻印平瓦「東口二」、碁石1、銅椀、鉄滓、建築木材1、	部分的に石組みあり
SK32	円形？	東西0.6以上×南北0.9以上	1.3以上				17世紀末～18世紀初め	土師器皿、瓦質土器鉢、国産陶器（肥前陶椀、信楽擂鉢・壺・甕）、国産磁器（肥前染付）、丸瓦、平瓦、桟瓦、鉄釘3、鉄滓、木簡？、曲物、漆椀、木片、桃核	井戸の可能性あり
SK33	円形	東西1.2×南北1.4	0.25				17世紀末～18世紀初め	土師器皿、瓦質土器鉢、国産陶器（肥前陶椀、信楽擂鉢）、国産磁器（肥前染付）、丸瓦、平瓦、塼、砥石1、	重複関係からSK34より新
SK34	円形	東西1.3×南北1.4	0.25				17世紀末～18世紀初め？	土師器皿、国産陶器（信楽擂鉢）、国産磁器（肥前染付）	
SX35		東西3.3以上×南北1.6	0.1	埋甕遺構 東西4列以上、南北2列			17世紀以降？	土師器皿、国産陶器（信楽擂鉢）、国産磁器（肥前染付・皿）、丸瓦、平瓦	抜き取り坑のみ
SK36	円形？	径0.9	0.8				18世紀前半	土師器皿・焙烙、瓦質土器鉢・甕、国産陶器（信楽擂鉢・鉢・壺）、国産磁器（肥前染付・皿・蓋）、丸瓦、平瓦、銅銭（判読不能1）、鉄釘1、銅金具1、軒桟瓦	埋甕・埋桶遺構の抜き取り坑か？重複関係からSK32より新
SK37	方形	東西2.25×南北2.1	0.65				18世紀前半	土師器皿・焙烙、瓦質土器浅鉢・擂鉢、国産陶器（信楽擂鉢・壺・瓶・椀、肥前陶椀）、国産磁器（肥前染付・皿・猪口・壺・蓋）、丸瓦、平瓦、桟瓦、塼、鉄滓、曲物、漆椀、桃核	
SK38	方形？	東西0.4以上×南北0.6以上	0.4				18世紀前半？	土師器皿、丸瓦、木屑、曲物、樹皮、刷毛（墨書あり）、瓦質	重複関係からSK37より新
SK39	楕円形？	東西2.3以上×南北1.3以上	0.7以上				18世紀後半	土師器皿、瓦質土器鉢・壺、国産陶器（信楽擂鉢・土瓶・擂鉢・甕）、国産磁器（肥前染付・皿・仏飯器・備前徳利）、丸瓦、平瓦、桟瓦、熨斗瓦、砥石1、鉄釘1	
SK40	方形	東西3.2×南北2.0	0.2				18世紀後半～19世紀前半	土師器皿、瓦質土器鉢、国産陶器（肥前陶椀、信楽擂鉢・鉢・壺）、国産磁器（肥前染付・皿）、軒桟瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦、土管	
SE41	円形	径1.5	0.9以上				18世紀後半～19世紀前半？	土師器皿・焙烙、国産陶器（信楽擂鉢・椀？）、国産磁器（肥前染付）	重複関係からSX35より新
SK42	方形	東西3.0×南北4.8	0.1				19世紀前半	土師器皿・焙烙、瓦質土器深鉢、国産陶器（肥前陶椀、信楽擂鉢・鉢・擂鉢・甕）、国産磁器（肥前染付・皿・瓶）、丸瓦、平瓦、桟瓦、鉄釘2、銅釘1、木札1、漆椀、	壁沿いに護岸の杭あり
SK43	長方形	東西3.0×南北1.1以上	0.3				19世紀前半	土師器焙烙、瓦質土器甕、国産陶器（肥前陶椀、信楽擂鉢・甕、軟質施釉陶器皿）、国産磁器（肥前染付）、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦、鉄滓	
SX44	長方形	東西3.7×南北1.8	0.3	方形、石組と板組	東西3.3×南北1.3		19世紀前半	土師器皿・焙烙、瓦質土器鉢、国産陶器（肥前陶椀、信楽擂鉢・鉢・擂鉢・壺・瓶・土瓶・行平・蓋）、国産磁器（肥前染付・皿・瓶）、円盤形土製品1、丸瓦、平瓦、桟瓦、石硯（泥岩製1、頁岩製1）	
SK45	長方形	東西1.9×南北1.4	0.35				19世紀前半～中頃	土師器皿・焙烙、国産陶器（肥前陶椀、信楽擂鉢・擂鉢・甕）、丸瓦、平瓦、桟瓦、	
SK46	不整長方形	東西3.5×南北2.3	0.45				19世紀中頃	国産陶器（信楽擂鉢・鉢・壺）、国産磁器（肥前染付・皿）、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦、	

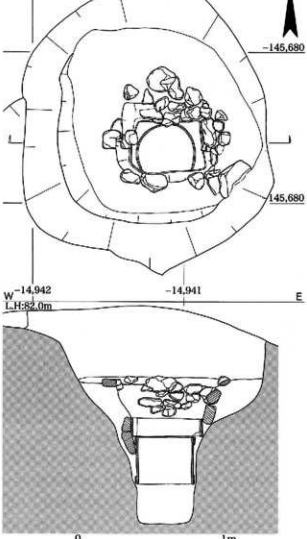
戸１基（ＳＥ01）、土器埋納土坑１基（ＳＫ06）、溝１条（ＳＤ07）がある。全容が判明する掘立柱建物はＳＢ02の１棟のみであるが、他の建物も柱穴の規模等から中小規模と考えられる。ＳＥ01は井戸枠が抜き取られており、底の集水施設が２段分残存する。集水施設は下段が径約36cm、高さ約30cmの円形曲物、上段が東西約45cm、南北約35cm、高さ約12cmの折敷を利用している。ＳＫ06は、石の蓋をした須恵器壺Ｑを埋納したもので、壺内の土を取り出していないため内容物の詳細は不明だが、Ｘ線撮影の結果径約１cmの球状もの１点と銅銭一枚が内蔵されていることが判明した。ＳＤ07は、第２発掘区で検出した南北方向の溝で、暗青灰色粘土で埋まる。調査範囲が狭く、東七坊大路に関するものか不明。

平安時代　井戸２基（ＳＥ08・09）、土坑（ＳＫ10・11）と柱穴多数がある。年代は井戸ＳＥ08が平安時代中頃（10世紀前半）の他は、平安時代後半である。ＳＥ08は大半が現代の井戸で破壊されているが、土師器が多くまとまって出土した。ＳＥ09の掘形は、上半部では平面楕円形であるが、下半部では隅丸方形となり、井戸枠は抜き取られていると考えられる。埋土の上層からは13世紀末の土器が、下層からは少量の11世紀末の土器と共に六稜鏡がほぼ完形で出土した。土坑ＳＫ10と11からはいずれも完形品を含む土器が出土している。

鎌倉時代の遺構　井戸１基（ＳＥ14）、土坑（ＳＫ12・13・15・16・20・21）、溝（ＳＤ17～19）と柱穴多数がある。第１発掘区西半にはその大部分を占めるＳＫ16とそれに付属するＳＤ17～19がある。土坑の平面形は不整方形で、北辺と東辺が直線的であるが西辺はいびつで、発掘区南側に続く。南北溝ＳＤ17はＳＫ16の南東部で接続し、土坑底の東辺部と北辺部に沿って流れ、北辺中央部でなくなる。土坑北西隅部では東西溝ＳＤ18・19が接続する。土坑底には北西隅のＳＤ19の東側、ＳＥ09の北側、ＳＥ14の北側の大きく３箇所に窪みがあり、完形の土師器皿が重なり合って大量に出土する。この他にも多種多様な遺物が出土しており一覧表に記す。完形品の土器を廃棄した土坑はこの他にも多くある。ＳＫ12では土師器皿の他、瓦器椀、須恵器鉢等が出土し、ＳＫ20ではほとんどが土師器皿である等、土器組成の差が見られる。

室町時代の遺構　埋甕遺構（ＳＸ25・26・28）、石組土坑（ＳＸ27）、土坑（23・24）、柱穴がある。埋甕遺構は３群認められ、ＳＸ25は南北２列以上、東西４列以上、ＳＸ26は南北２列以上、東西７列以上、ＳＸ28は南北２列、東西８列である。甕が残存していたのは、ＳＸ25が５基（常滑窯４基、備前窯１基）、ＳＸ26が１

井戸　SE01（南から）



井戸 SE01　平面・立面図（1/25）

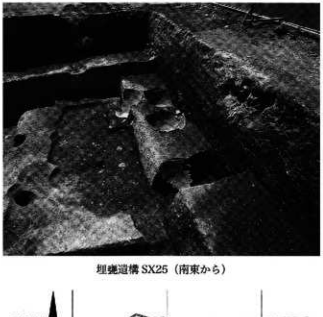
基（備前窯）である。なお埋甕と抜き取り坑には、各遺構ごとに北西から東西方向へ順に番号を付した。これらの埋甕遺構は、遺構面から約0.4m 下で遺構検出を行った結果、掘形底に残る僅かな抜き取り痕跡を検出したの

HJ第531次調査　遺構平面図（室町時代以降、第2発掘区は鎌倉時代以降・1/200）

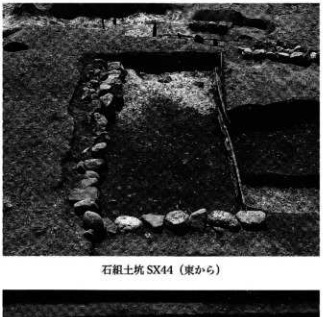
第1発掘区西半部全景（室町時代以降　北西から）

みである。しかし、ＳＸ25は一部が発掘区周辺に残した犬走り内にあったため、その部分のみ埋甕上面からの発掘調査ができた。ＳＸ25では５基の埋甕（埋甕１～５）が残存するが、これらは１つの大きな掘形内に据えられている。掘形は西側と北側が発掘区外に続き、東側が江戸時代の遺構に破壊されている。掘形の南端は埋甕５から約２ｍ南側にあり、そこにもう二列分の埋甕が想定できる。甕内からは甕の破片と共に壁土が出土した。ＳＸ26の埋甕14抜き取り坑底には、信楽窯の擂鉢がほぼ完形で口縁を上にして据え置かれている。埋甕の底に設置されていたものとも考えられる。擂鉢の内面には３条１単位の擂目があり、摩滅がはげしい。ＳＸ27は平面長方形の石組土坑で、石組は１段分が残るが、石の多くは抜き取られ残存状態がは悪い。ＳＫ23・24はいずれも平面長方形の土坑で、底に人頭大の石を２つ南北に並べており、両者は約2.4ｍの間隔で東西に並ぶ。形態から何らかの構造物の基礎と考えられるが性格は不明である。出土遺物は少なく、瓦質土器から14世紀でも後半以降のものと考えられる。

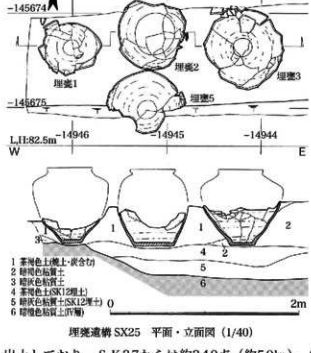
江戸時代の遺構　井戸２基（ＳＥ30・41）、土坑（ＳＫ29・32～34・36～40・42・43・45・46）、埋甕遺構１基（ＳＸ35）、石組土坑１基（ＳＸ44）、石組溝１条（ＳＤ31）、柱穴多数がある。江戸時代前期の遺構は少なく、ＳＫ29とＳＥ30があるのみである。ＳＥ30は円形石組みの井戸で、大半が発掘区外北側にあるため、井戸枠内は約0.2ｍまでしか掘削できなかった。江戸時代中頃～後半の遺構は、第１発掘区西半に土坑が多く見られ、敷地奥に掘られる傾向を看取できる。ＳＥ41は平面円形掘形で、深さ約0.9ｍまで掘削したが枠は確認できなかった。ＳＤ31は南北方向の溝で、北でやや東にふれるる。ＳＸ44の北西隅近くで西側へ鉤型に曲がる。またこの部分から北側5.4ｍ分は、溝の西側が石組によって護岸されている。その他の部分にも杭が溝に沿って打ち込まれる所があり、護岸があったと考えられる。鉤型に曲がる部分の周辺では、埋土に焼土が多く含まれていた。ＳＸ44は石組みが南と東側に１段分あり、西側と北側は杭を打ち込み２枚の横板で擁壁する。土器・瓦の破片を出土する土坑が多く、いずれも廃棄処理の機能が考えられる。特にＳＫ37・39からは多量の瓦が



埋甕遺構 SX25（南東から）



石組土坑 SX44（東から）



埋甕遺構 SX25　平面・立面図（1/40）

溝 SD31（北から）

出土しており、ＳＫ37からは約340点（約50kg）、ＳＫ39からは約650点（約66kg）が出土した。ＳＫ42は平面隅丸方形の土坑で、土坑壁際の底には約0.4～0.6m間隔で杭列があり、擁壁があったと考えられる。時期は19世紀前半で、当時の遺構面から復原すると深さ約0.8mになる。瓦・土器と共に、「木綿屋佐兵衛」の墨書がある木札が出土した。ＳＫ32は埋土が暗灰色粘質土で、湧水がはげしく井戸の可能性がある。ＳＫ36は平面円形でほぼ垂直に掘り込まれ、桶または甕等を埋設していたものと考えられる。

先述したように第１発掘区では江戸時代後半と中頃の整地層（Ⅰ層・Ⅱ層）がある。発掘区壁面の土層観察から、これらの層と遺構との関係を記すと、ＳＫ29・32・ＳＤ31がⅡ層に覆われており、ＳＫ36・39がⅡ層上面から掘り込まれ、Ⅰ層に覆われていることがわかる。これら遺構の出土遺物から、Ⅰ層が18世紀後半以降で、Ⅱ層が18世紀前半頃の年代でと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

古墳時代から江戸時代までの各時期のものがあり、土器類が遺物整理箱51箱、瓦類が63箱、金属製品が４箱、木製品が２箱、石製品が１箱、壁土等が１箱ある。土器類はＳＫ16出土の土師器皿と、ＳＸ25出土の大甕が多くを占める。ＳＥ09・ＳＫ16出土の遺物とＳＫ42出土の木札について記す。

ＳＥ09出土遺物は上層と下層に分かれ、上層から13世紀末の土師器、下層から11世紀末の土師器皿、瓦器椀、銅鏡、この他に黒色土器Ａ類椀、灰釉陶器椀、須恵器甕等やや年代が古いものが出土した。１～４は土師器皿で、いずれも「て」字状口縁の小皿である。口径は10.0～10.8cmである。5は灰釉陶器椀で、内外面に施釉

HJ 第531次調査　井戸 SE09　出土遺物（1/4　7のみ 1/2）

する。6は瓦器椀で、外面は3分割の密なヘラミガキ調整、内面も密なヘラミガキ調整、見込みには13回以上のジグザグ状の暗文がある。7は唐草双鳥紋六稜鏡（巻首図版・参照）で、面径は9.5㎝、重量は85gある。中央の鈕は欠け、かわりに鏡面に達する孔を2つ穿っている。圏線で内区と外区に分け、内区には紐を中心に鳥と唐草を各2個ずつ対称に配置し、外区には省略された唐草文を6個連ねる。鋳上がりが悪く、踏み返し鋳造と考えられる[1]。

土坑ＳＫ16からは検出遺構一覧表に記した遺物が出土している。出土土器から時期は13世紀末頃で、以下主なものを記す。

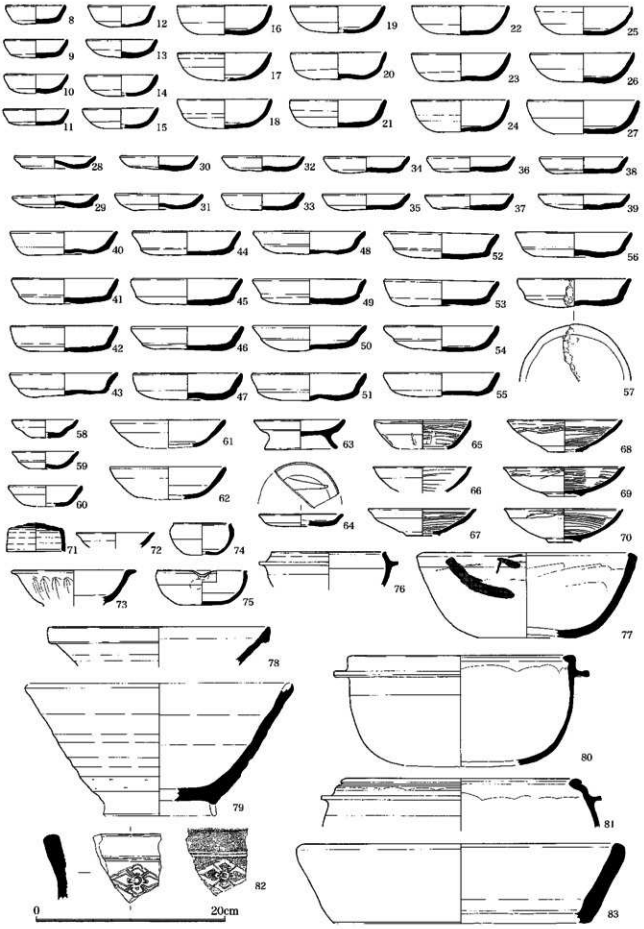
土器類は遺物整理箱10箱分出土し、大半が土師器皿である。土師器皿は完形に復原できるものが多い一方、その他の土器はほとんどが破片である。

土師器皿は口径が9㎝前後の小皿（28～39）と、12㎝前後の大皿（40～57）があり、大皿の比率が高い。小皿には底部を上げ底状にしたヘソ皿（28・29・31）がごく少量ある。いずれも内面をナデ調整後、口縁部をヨコナデ調整する。大皿には内面をハケメ調整するものがある。外面は口縁部以下は未調整で、粘土接合痕跡や板の圧痕が見られるものがある。大皿の57には、底部から口縁部に及ぶ粘土接合痕跡が残る。胎土は、橙色からやや赤みを帯びた灰白色の色調で一定しているが、灰色のものや黒斑があるものがいくらかある。この他にやや深手の皿（8～27）が出土している。口径は数種類あり、6～11㎝代まで9㎝代を除き1㎝ごとに分布している。調整手法は通常の皿と同様であるが、作りは丁寧で、器壁もやや薄くゆがみが少ない。この他京都産と考えられる胎土が白色の皿（58～62）が少量ある。

土師器羽釜には菅原分類[2]の大和Ｂ型とH1型（81）の他、口縁端部を内側に水平に折り曲げるもの（80）がある。後者は口縁部の形態が大和H2型に似るが、H2型に比べ口縁端部は短く器壁は厚い。従来のH2型の出現時期よりかなり古く、その初現期のものかは今後の類例を待ちたい。いずれの羽釜も、鍔の幅は1.0～1.5㎝と短い。また小型の羽釜も数点出土している。76は口縁端部を玉縁状にしたもので、胎土は砂が少なく精良である。内外面には煤が付着しない。

土師器鉢には大小のものがある。74・75は口縁部がヨコナデ調整、内面がナデ調整、外面が未調整である。77は、外面が未調整で粘土紐接合痕が残り、内面が板状工具によるナデ調整である。外面に墨書がある。

瓦器には椀と皿があるが、12～13世紀の各時期のものが破片で出土している。瓦器皿は、見込み部に数回のジグザグ状の暗文がある。椀に比べ出土数は少ない。瓦器椀には大和型の他、和泉型と楠葉型の輪花椀がある。大和型の椀は、器形のひずみがはげしく、断面三角形の高台を雑に貼り付ける。口縁部外面にヘラミガキ調整を行うもの（68～70）と、行わないもの（66・67）とがある。内面は10～22回転の渦巻き状のヘラミガキ調整である。川越編年[3]のⅢ-DとⅢ-Eにあたる。楠葉型の輪花椀（65）は1点出土しており、体部外面にヘ



HJ 第 531 次調査　土坑 SK16 出土土器 (1/4)

ラ状工具を縦方向に押し当てて5弁の輪花風に形作る。口縁端部外面をヘラミガキ調整し、体部内面は13回転の圏線状のヘラミガキ調整する。見込み部は欠損し文様の有無は不明。和泉型の椀は数点の小破片で図化できないが、内外面のヘラミガキ調整はない。

瓦質土器には浅鉢がある。82はやや内傾した体部の浅鉢で、小片のため口径が復原できないが、おおよそ30cm以上あると推定できる。内外面は緻密な横方向のヘラミガキ調整で、表面の炭素は失われ灰白色である。外面には2条の沈線がめぐり、その下には花菱の単体のスタンプ文が押印される。従来、奈良火鉢は菊花の単体スタンプ文が押印される輪花型のものが出現期のものとされているが、今回の例はそれとは趣が大きく異なっている。また花菱文はやや時代が下ると奈良火鉢では通有の文様であるが、これらは連続して押印されて文様帯を構成しており、単体での押印例はない。いずれにしろ奈良火鉢の出現期を考える上で重要な資料となろう。83は12世紀後半頃からしばしば出土するタイプの浅鉢で、内外面のヘラミガキ調整は粗く、ミガキ調整下のヨコナデ調整が見られる。

須恵器には東播系の鉢（78）と甕が少量ある。東海系の陶器には鉢と甕があり、東播系のものと比べ出土量は多い。ほとんどが甕で、口縁部内面端部に出線がめぐる12～13世紀前半頃のものが多い。79は鉢で欠損した高台跡を研いで再使用している。内面は摩耗して平滑である。

輸入陶磁器には白磁・青磁・青白磁・褐釉陶器がある。白磁は玉縁状や外反口縁の碗など平安時代後期のものが多い。72は口縁端部の釉を掻き取る白磁皿である。青磁も龍泉窯系の草花文や連弁文の碗など平安～鎌倉時代のものが多い。73は青磁杯で、外面に鎬連弁文を彫り、青磁釉を厚く施釉する。高台は欠損するが、断面三角形と考えられ、森田分類[4]の皿類にあたる。71は青磁の蓋で、口縁端部を除く外面に施釉する。この他青磁・白磁・青白磁・褐釉の壺の破片があり、壺の出土が目立つ。

瓦類は整理箱5箱分（約470点、43kg）あり、丸瓦と平瓦が大半で、型式不明の奈良時代の軒丸瓦が1点ある。

ＳＫ42出土の木札は、長さ7.2cm、幅3.2cm、厚さ0.6cmの長方形で、上端から1.0cm下の中央部に径2mmほどの孔がある。表裏に墨書があり、「川□□組　今小路町　木綿屋佐兵衛」「□□組　□□」とある。後述する「今小路町北南両町大絵図巻文」には、調査地の2軒北側の住人に木綿屋佐兵衛が見られる。遺構の年代は絵図以降で、同一人物もしくは名前を継いだ人物の可能性が高い。

V　調査所見

今回の調査では、当初の想定を越えて各時代の遺構が良好に残存しており、以下の成果が得られた。

①　奈良時代の遺構・遺物包含層が確認でき、鎌倉時代以降の削平を免れた奈良時代の遺構が、周辺にも存在することが考えられる。一方、調査が小規模なため、宅地利用の状況や、東七坊大路に関しては不明である。

②　平安時代から室町時代の各時代の遺構を検出し、平城京廃絶後も宅地として再利用し続けてられた様相が判明した。各時代を概観すると、平安時代には井戸の存在が示すように、断続的に宅地利用された。ＳＥ09出土の六稜鏡は、ほぼ完形品で残存状況もよく貴重な資料といえる。鎌倉時代には遺構の数が増加し、土坑に多量の土器が廃棄された。土坑出土の一括土器には他地域産のものが僅かながら含まれ、土器研究のみならず当時の物流を考える上でも貴重な資料である。室町時代には埋甕遺構が築かれ、多量の液体を貯蔵する施設が存在したことがわかる。甕の内容物は不明であるが、その総量からは考えて何らかの商品の生産または備蓄に関わるものであろう。奈良町遺跡内での中世の埋甕遺構は5例目となる。

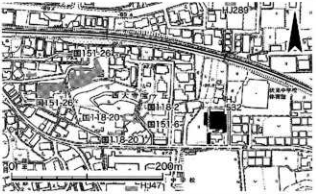
③　江戸時代の各時期の遺構を検出し、宅地の利用状況を考える上で良好な資料が得られた。発掘区内は18世紀前半頃と18世紀後半以降に2回の整地が行われ、各時期とも敷地の奥には塵芥処理用の土坑が掘削される。史料によると、今小路町は宝永元年（1704年）・享保11年（1726年）・宝暦12年（1762年）の3度にわたる大火に見舞われている。調査ではこれらの大火を示す焼土層等は確認できなかったが、18世紀前半頃の整地の時期が宝永または享保の大火と近接しており、何らかの関係が推定できる。また、安永2年（1773年）の今小路町を描いた絵図「今小路町北南両町大絵図巻文（天保4年（1833年）写[5]）」によると、今回の調査地は北から「小泉屋　赤兵衛」「菱屋　兵衛」「紺屋　又六」の3軒にあたり、南北に3つの宅地があったことがわかる。間口の規模は、北から「二間四尺二寸、三間四尺五寸、二間六尺四寸」とあり、これらの合計は現在の敷地の間口規模とほぼ等しい。この宅地割りを発掘区内に当てはめると、北から一軒目と二軒目の境界線がＳＫ33・34とＳＸ35の間に、二軒目と三軒目の境界線がＳＫ43とＳＸ44の間にあることがわかる。江戸時代の遺構分布は、それぞれの宅地内でおおよそおさまる傾向が認められようか。

（中島和彦）

1）鏡のデジタル図化については、橿原考古学研究所の奥山誠義・水野敬典両氏に お願いした。
2）奥城正明「鐵河における土器の製作と流通」『文化財論叢』1983　奈良国立文化財研究所
3）川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983　奈良国立文化財研究所
4）森田勉・橋田賢次郎「人宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集 4』1978　九州歴史資料館
5）個人蔵

6. 平城京跡（右京北辺四坊三坪）の調査　第532次

事業名	マンション建設	調査期間	平成17年5月31日～7月29日
届出者名	株式会社　奥村組	調査面積	667㎡
調査地	奈良市西大寺宝ヶ丘731-1、738-3	調査担当者	久保邦江



ＨＪ第532次調査　発掘区位置図（1/5000）

Ⅰ．はじめに

調査地は、条坊復原によると右京北辺坊四坊三坪の南東隅部に相当する。この三坪と西隣の六坪との間には称徳山荘の園地とみられる池が存在し、三・六坪は称徳山荘として一体利用が推定されている。また、市ＨＪ第289次調査では古墳時代後期後半の掘立柱建物・掘立柱列・土坑を検出している。本調査では西四坊坊間東小路の確認と、三坪内の様相を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．基本層序

調査地は西ノ京丘陵の東斜面に位置し、北西から南東の方向に下る緩い傾斜地である。基本的な層序は造成土(0.1m)、耕土 (0.08m)、床土 (0.06m)、濃黄褐色土(0.08m)、灰褐色砂質粘土 (0.08m)、灰色粘質土 (0.2m)、整地土の黄褐色粘土ブロック混灰色砂質粘土 (0.15m) と続き、現地表から0.75m下で黄褐色砂質粘土の地山にいたる。南東へむかうに従い整地土が厚く堆積する。遺構検出は地山上面と整地層上面で行い、遺構面の標高は第2発掘区北端で84.1m、第1発掘区南端で83.1mである。第1発掘区東拡張部の東半は約0.8mの深さまで地下げがされており、南端部には灰色粘土の溜まる窪みがある。

ＨＪ第532次調査　遺構平面図（1/400）

Ⅲ．検出遺構

検出遺構には古墳時代の方形区画溝1条，斜行溝1条、土坑2基、奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、溝2条、井戸1基、土坑2基がある。

古墳時代の遺構　ＳＤ01は第1発掘区東半で確認した溝（幅0.4～0.8m、深さ0.6m）である。溝は直角に折れ、さらに北に屈曲する。北西角部で完形の布留式甕が出土している。他に第１発掘区西南隅部分で土坑ＳＫ02・03、第3発掘区南西隅で斜行溝ＳＤ04を検出した。

奈良時代の遺構　ＳＤ05は第一発掘区東辺部で確認した南北溝である。位置的に西四坊坊間東小路西側溝とみられる。ＳＤ06はＳＤ05と並行して三坪宅地内で検出した南北溝である。いずれも地山の黄褐色粘土を含む土で埋め戻された後、掘立柱建物ＳＢ10が建てられている。

Ⅳ．出土遺物

遺物整理箱10箱分の遺物が出土。縄文時代の有茎尖頭器がＳＤ01最上層、鉄製鋤先・石製陽物がＳＥ07から出土した。木簡は第１発掘区東端の地下げ部分の南端部の灰色粘土から出土した。木簡には五文字書かれており、うち「国」の一文字のみが判読できる。他に古墳時代前期の土師器・須恵器の破片、奈良時代の線刻土器、軒丸瓦（6133Ｒ）丸瓦、平瓦、塼の破片がある。

Ⅴ．調査所見

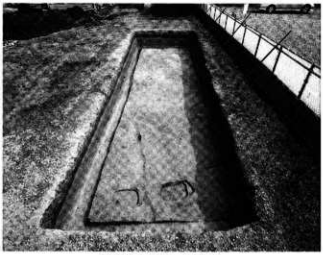
今回の調査では、古墳時代前期の溝を確認し、平城京以前の遺構がこの地域に広がっていることを確認した。ＳＢ10は奈良時代後半の桁行柱間が12尺の大規模な建物で、西四坊坊間東小路西側溝、井戸ＳＥ07を埋め立てた後に建てられており、8世紀中頃以降に三坪は、東隣の二坪と一体で利用されている可能性がある。　（久保邦江）

ＨＪ第532次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	検方向	規模		桁行全長	梁行全長	柱間寸法m		備考
		桁行（間）×梁行（間）		m	m	桁行	梁行	
ＳＢ10	東西	4以上×2以上		7.2以上	2.4以上	3.6	2.4	柱掘形埋土から8世紀の土師器片・須恵器片出土。ＳＤ05・ＳＥ07より新しい。
ＳＡ11	南北	3		9.3		2.4-2.4-2.4-2.1		8世紀の土師器片・須恵器片。掘立柱列。ＳＡ12と2.8m隔て並行。
ＳＡ12	南北	3		9.3		2.4-2.4-2.4-2.1		8世紀の土師器片・須恵器片。掘立柱列
ＳＡ13	南北	2以上		4.8		2.4		8世紀の土師器片・須恵器片。掘立柱列。ＳＡ11より新しい。

遺構番号	掘形				主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模（m）		深さ（m）		
ＳＤ01	方形区画溝	東西11以上南北15以上幅0.4～0.8		0.6	上層：8世紀の須恵器片・土師器片・有茎尖頭器 （奈良時代の整地層）　中層：6世紀の土師器片 下層：5世紀初頭の土師器片、完形の布留式甕	検出部をもつ方形区画溝。国土方眼方位に対し北で西に約30°振れている。断面形状はＵ字形もしくは逆台形。
ＳＫ02	隅丸方形	東西2.2南北2.2		0.8	5世紀の土師器	土坑底で小ピット２基確認。主軸は西で北に約30°振れている。
ＳＫ03	隅丸方形	東西2.0南北1.8以上		0.4	5世紀の土師器	ＳＫ02より新しい。主軸は西で北に約30°振れている。
ＳＤ04	斜行溝	南北4.0以上幅1.2～1.8		0.6	上層：奈良時代の土師器片・須恵器片 下層：6世紀の須恵器片	北で西に約20°振れる。
ＳＤ05	南北溝	長さ22以上幅0.75以上		0.3	8世紀の須恵器片・土師器片・丸瓦片	西四坊坊間東小路西側溝。東半部は地下げで壊されており、溝幅不明。
ＳＤ06	南北溝	東西16以上幅0.8～1.2		0.25	8世紀の須恵器片・土師器片・不明瓦片	ＳＤ05と5.5mの間隔をあけて西側で併行する。
ＳＥ07	円形	直径1.85		2.2	8世紀中頃の土師器片・須恵器片・丸瓦片・鉄製鉋先・石製陽物形	井戸枠は抜き取られ構造は不明。ＳＤ06より新しい。
ＳＫ08	隅丸方形	東西2.2南北2.4		2.7	8世紀の土師器片・須恵器片	底部が二段に掘られている。湧水層にはあたらなかった。
ＳＫ09	不整円形	東西0.0南北0.65		0.25	8世紀前半～中頃の須恵器・土師器片	

第１発掘区全景（南から）



第２発掘区全景（北から）

第３発掘区全景（南から）

溝ＳＤ01（南東から）

7．平城京跡（右京四条四坊・西三坊大路）の調査　第533次

事業名	個人住宅新築	調査期間	平成17年6月13日～6月21日
届出者名	個人	調査面積	14㎡
調査地	奈良市宝来三丁目815番2	調査担当者	池田裕英

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京四条三坊、四条四坊の西三坊大路と四条条間北小路の交差点上にあたる。

調査地周辺には円弧状の地割がみられ東400mに宝来山古墳、東北250mに兵庫山古墳も存在することから、古墳の遺存地割（円墳または前方後円墳の後円部）の可能性も考えられた。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、上から造成土、灰黒色粘土（旧耕土）、暗灰色粘質土、灰褐色土、灰褐色粘質土、暗灰色粘土と続き、現地表下約1.4mで灰緑色粘土の地山にいたる。遺構検出はこの灰緑色粘土上面で行った。地山上面の標高は74.9mである。

Ⅲ　検出遺構

遺構検出の結果、奈良時代の条坊遺構や古墳に関わる遺構はまったく検出できず、円弧状の遺存地割の性格も明らかにできなかった。位置的に発掘区は西三坊大路路面上に位置している可能性が高いと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

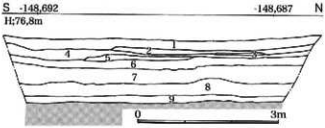
本調査では、出土した遺物はない。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、本発掘区は大路路面上にあたるとみられ、本調査地から南に約150mの場所で行った市ＨＪ第304次調査[1]でも条坊遺構は検出されていない。大路が条坊復原よりも西にずれる可能性を考える必要がある。

（池田裕英）

1）奈良市教育委員会「平城京右京四条三坊十四坪・西三坊大路の調査第304次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成６年度』1995

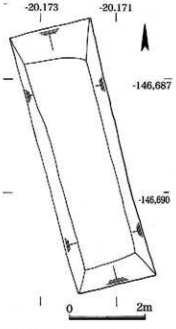


1：造成土
2：灰黒色土（旧耕土）
3：暗茶灰色土
4：茶灰色土
5：灰茶色粘土
6：暗灰色粘質土
7：灰褐色土
8：灰褐色粘質土
9：暗灰色粘土
地山：灰緑色粘土
（トーン部分）

ＨＪ第533次調査　発掘区西壁土層断面図（1/80）

ＨＪ第533次調査　発掘区位置図（1/5000）

発掘区全景（南から）



ＨＪ第533次調査　発掘区遺構平面図（1/100）

8. 平城京跡（右京二条二坊九坪）の調査　第534次

事業名	マンション建設	調査期間	平成17年9月1日～9月16日
届出者名	新星和不動産株式会社	調査面積	100㎡
調査地	奈良市西大寺国見町一丁目2137-74	調査担当者	久保邦江・中島和彦

Ⅰ．はじめに

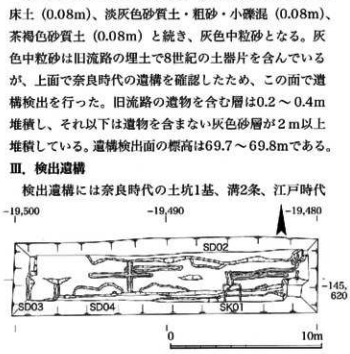
調査地は、条坊復原によると右京二条二坊九坪の南西隅部に位置しており、調査地西端に二条条間北小路と西二坊坊間西小路の交差点が推定される。周辺の調査例には、約120m東で県1993年度調査があり、二条条間北小路と西二坊坊間路の交差点を確認している。この調査の結果から、本発掘区は二条条間北小路路面にあたると推定され、路面の状況を確認する目的で調査を実施した。

Ⅱ．基本層序

発掘区内の基本層序は、造成土（0.6m）、耕土（0.15m）、床土（0.08m）、淡灰色砂質土・粗砂・小礫混（0.08m）、茶褐色砂質土（0.08m）と続き、灰色中粒砂となる。灰色中粒砂は旧流路の埋土で8世紀の土器片を含んでいるが、上面で奈良時代の遺構を確認したため、この面で遺構検出を行った。旧流路の遺物を含む層は0.2～0.4m堆積し、それ以下は遺物を含まない灰色砂層が2m以上堆積している。遺構検出面の標高は69.7～69.8mである。

Ⅲ．検出遺構

検出遺構には奈良時代の土坑1基、溝2条、江戸時代末の溝1条、時期不明の溝7条がある。



ＨＪ第534次調査　発掘区遺構平面図（1/250）

発掘区全景写真（東から）

ＨＪ第534次調査　発掘区位置図（1/5000）

奈良時代の遺構　ＳＫ01は発掘区南端で検出した平面形隅丸方形の土坑（東西1.1m、南北1.1m、深さ0.4m）である。埋土は2層あり、両層から8世紀の須恵器片・土師器片が出土し、特に下層からは土師器甕の破片がまとまって出土した。ＳＤ02は発掘区北端で検出した南北溝（長さ14.5m、深さ0.2～0.4）である。南肩を検出した。埋土から8世紀の須恵器・土師器・丸瓦・平瓦の破片が多く出土し、下層からは8世紀の軒平瓦が出土した。ＳＤ03は発掘区西端で検出した南北溝（長さ1.5m以上、深さ0.2m以上）である。東肩を検出した。埋土から8世紀の須恵器・土師器の破片が少量出土した。

江戸時代の遺構　発掘区南辺部で確認した東西方向溝ＳＤ04は、東西16mで、北肩のみ検出した。茶褐色砂質土から掘削され、検出面からの深さは0.2mである。埋土から8世紀の須恵器・土師器片と18世紀末～19世紀初頭の肥前窯製や、京・信楽窯系の陶磁器が出土した。

Ⅳ．出土遺物

遺物整理箱10箱分の遺物が出土した。ＳＤ02の出土遺物が多く、8世紀の軒平瓦（6643Ｃ）、凹面に「×」のヘラ記号のある平瓦、・塼・円面硯・製塩土器片等がある。ＳＤ04から8世紀の軒片瓦（6641Ｅ）が出土した。他に包含層から軒丸瓦（6275種別不明）が出土した。

Ⅴ．調査所見

今回の調査地は、二条条間北小路の路面と推定されたが、奈良時代の遺物を含む遺構を検出した。西隆寺旧境内や市HJ第207次調査では、周辺の条坊関連遺構が北や西にずれることが報告されており、今回の発掘区が十坪内の宅地となる可能性もある。　（久保邦江）